

文部省檢定
大正三十一年一月七日

375.9
Y019
資料室



師範學校

吉田彌平編

國文教科書

本科用

卷三

東京 光風館藏版

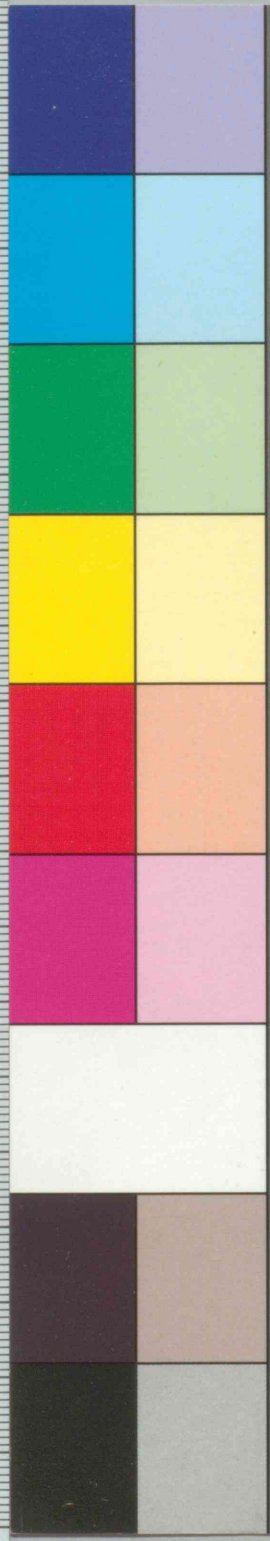


教
5
20

42599

教科書文庫

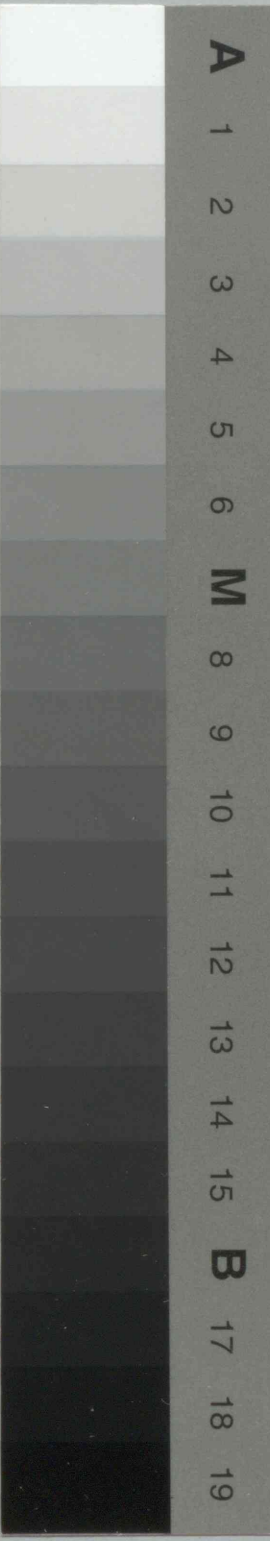
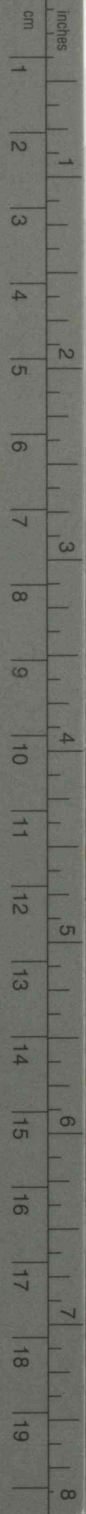
4
810
51-1923
20000
18388



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375.7
Y019

教科書文庫
4
810
51-1924
2000018388

文部省檢定
師範學校國語教科書
大正三十一年一月七日

吉田彌平編

本科用

師範學校
國文教科書

東京 光風館藏版

広島大学図書
2000018388



廣島大學圖書印



師範學校 國文教科書 本科用卷三

目次

一	物の初	幸田露伴	一頁
二	をさなご	小林一茶	六
三	春宵	夏目漱石	九
四	蛙	泉鏡花	五
五	兒なくらむ		二四
六	皇太后宮を悼み奉る	星野恆	二六
七	奈良の舊都	藤岡作太郎	三〇

目次

八	マスク	菊池 寛	三
九	修善寺便	尾崎紅葉	五
〇	郭公		七
〇	鍾馗	石川雅望	九
〇	尼法師その一	福地櫻痴	一〇
一	尼法師その二	福地櫻痴	一三
一	尼法師その三	福地櫻痴	一六
一	カーライルの舊栖	夏目漱石	一八
一	ウエストミンスターとバンテオン	河上 肇	二〇
一	先達	兼好法師	二四

一	醉興	兼好法師	二五
〇	最明寺入道	兼好法師	二七
〇	熊王の發心	隠士松翁	二九
一	童の心	北原白秋	三五
二	旅行	山路愛山	三三
三	汽車に乗りて	上田 敏	三〇
四	芳流閣上の奮闘	瀧澤馬琴	三三
五	松の下露	〔太平記〕	三四
六	橋辨慶	〔謠 曲〕	三六
七	國さかひ		三九
八	人の間に答ふ	藤田東湖	四一

- 二九 長柄堤の訣別その一……………坪内逍遙 一六
- 三〇 長柄堤の訣別その二……………坪内逍遙 一七

附 録

第三篇 音 訓

- 一 字音……………一
- 二 字訓……………三
- 三 和字……………九



師範 學校 國文教科書 本科用卷三

幸田露伴
文學者。
文學博士。
慶應三年(五三
七)生。

一 物の初

幸田露伴

よろづのもの、初こそは美はしく面白けれ。 物のほろり初れ、その 混沌わづかにわづかに
割れて天地漸く成りし時は、如何ばかり目ざましう心よか
りけん。それは見ねば知らず。まづ年の首の朝ぼらけ、大
路に箒目の浪清くして、千門チヨウカドに旗の日の紅ニホ翻ひらるすが、し
さ。行きかふ人々の面の色も若々しう、悔恨一年のウレを昨夜の關カキの
彼方に捨て、希望を此の曉の風の息吹に蘇らせ、今歳はと

一 物の初

勇める眼の中の勢もたのもしや。
雲の扉裂けて金光迸り騰り、紅盤焰旋りて瑤瑤爛る、太陽のさし昇りたる日の出づる初の景色は、春といはず冬といはず爽かなり。

樹影沈んで夕の水潤く、暮靄地に這ひて人の語静まる時、白玉潤を含んで大いなること車輪の如き月の薄縹の天にそつと出でたる、其の初のすゞしき心地は、之を何にか譬へん。潮の初も亦面白し。濱の沙固うして礫や、乾き沙木小白み、寄藻香を放つ千潮の極みに、沖の方漸く膨れて、さし潮の風に乗る来り、一分々に沙を蝕ひ、礫を呑み、潮泡渚に搖ぎて、豆蟹勇み奔り、海鷗天に舞ひて時に濤の頭に下り、寄藻

沙木のぬれく、て動かんとする折邊波に、まるふ貝殻も艶やかに、磯石未だものいはず、濤猶怒らねど、やがては澎湃、鞞の響震天撼地の勢をなして、龍王が無字の大経巻を巻いて、又舒べて、千古萬古人間に其の讀まんことを逼る日々の凄じき業を繰返さんとする意を示せる、何ともえ云はず壯なり。
天に挺んでては白雲を駐め、日を蔽うては山逕を青むる喬樹の、其の初杉も檜もひよろくとして、松も樺もなよやかなるをかしさ。雨の膏には怡悦の目を張りて笑み、風の咎には悲哀の聲を濕ませて戦けど、其の中に不屈の意氣を保ちて雪虐ぐれども偃して復起き、霜辱むれども萎けて再び

振ひ、日の父の光を慕ふ孝子の情誠に、月の母の露に甘ゆる少女の思やさしく、上に向ひ上に向ひ、自ら貞しうし自ら貞しうして終に其の生を遂げんとする勢ある、孔孟出でざるも道こゝに啓かれたりといふべし。

菽の初、菘の初、かはゆき甲拆の姿のしをらしや。地壓すれば芽ざさんとして芽ざし難きまゝ、伸びんとして屯り、身を屈めて一力入れ、根入漸く足りて辛うじて世に出でたる嫩青微緑柔かにして夢を結べる如き、さはらば消えんおぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ。

禽の初の卵殻の中にありてひくと鳴きたる、啐啄事了りて綿毛に風の當りたる、皆あはれに勇まし。彼の聲には嶰竹

裂けんとし、石破れんとする韻を藏し、此の姿には鐵翻颯を截りて崑崙を凌ぐ威を具ふ。

魚は苗にして江湖に遊ばんとし、蛇は寸にして藪澤に傲る。仔駒の生れて眼の色さへ定かならぬに、四蹄早くも軽く草

の煙を蹴て母馬に追附き、其の乳を立飲したる、あどなくして而も至健の徳を表す。獅子の兒の怒毛もまた硬からぬ

に千尺の崖より墜されて、巉巖の下に膽を張り爪を張りたる、流石に仰いで親の姿の霞に遠きを見ては、兒心の遺瀨なき思もすらんを、獸王の血統とて女々しからぬも尊し。

萬の物を観るに、其の初皆美はしく好し。人の子の生るゝや悪相なしと聞く。物皆始有り、願ふ所は其の始有る所以

鮮克在維

を遂げんことなるのみ。(洗心録)

小林一茶

通稱彌太郎。信濃の俳人。文政十年(三)五七歿す年六十

五。

二 在さなご

文政元年

こその夏竹植うるころ、うき節しげきうき世に生れたる娘

ものにさとかれとて名をさとよぶ。今年誕生日祝ふこ

ろほひになり手うちくあは、あたまてんく、かぶりか

ふりふりながら同じき子どもの風車といふもの持てるを、

しきりにほしがりてむづかればとみに取らせけるに、やが

て中に入ル、しやぶつて捨て、露程執念なく直に外の物に

心移りて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦

みて障子の薄紙をめりく、むしるに、「よくした、よくした。」と

一茶の詩

大正三年一月発行

幸田西路伴りまじらもつ

修善寺長にうたふもの

理想的小林

彌太郎信濃人

良夜塘抄

十五夜、せせの

かき、夜下さそ

ひもささ、菴の笠

玉ふれ、る飲ハ

らるし

河の岸

一茶

一茶

賞むれば、まこと、思ひ、けら
けらと笑ひて、^{一途に}むしりに
むしりぬ。心のうち一點の
塵もなく、名月のきらしくし
く清く見ゆれば、なかくに
心の皺^{しじ}を伸しぬ。
又、人の来りて、わんくはど
こに、「といへば、犬に指さし」か
あかあは、「と問へば、鳥に指さ
すさま、口もとより爪先まで
愛敬こぼれてあいらしく、春

阿彌陀佛と申すは
三千の菩薩を
侍り

牡鹿の角は、
その角は、
うた之まは序詞

の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺ゆる。
折から門に月さしていと涼しく、外にわらへの踊の聲のす
れば、たゞちに物投げすてゝ、片ゐざりにゐざり出でて、聲を
あげ手眞似して嬉しげなるを見るにつけ、いつしかかれを
も振分髪（生髪）のたけになして踊らせたらんには、二十五菩薩の
管絃（管絃）よりもはるかにまさりて興あるわざならんと、我が身
に積る老を忘れて憂さをなんはらしける。
かく日すがら牡鹿の角のつかの間も手足を動かさずとい
ふことなくて遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。
そのうちばかり母は飯炊き、そこら掃きかたづけてやがて
閨に泣聲のするを目の覺むる合圖と定め、手かしこくも抱

き起して、乳房あてがへば、すばくと吸ひながら胸板のあ
たりを打敲きて、（ここに）笑ひ顔をつくるに、母は長き胎内
の苦みも日々の襦袢（もろ）の穢はしきも打忘れて、手の中の玉と
撫でさすりて、一人喜ぶなりけり。
蚤のあとかぞへながらに添乳かな。（二茶全集）

夏目漱石の特色 超俗

三 春 宵

夏目漱石

夏目漱石
名は金之助。
文學者。
大正五年歿す
年五十。

九州大分縣別府市
白水町、其附近に
の觀海寺に於て
に於て五観ひ

山里の朧月夜に乗じてそゞろありきをする。觀海寺の石
段を登りながら、「仰數春星一二三」といふ句を得た。余は別
に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雑話をする氣もない。
偶然と宿を出て、足の向くにまかせてぶら／＼するうち、つ

い此の石磴の下に出た。しばらく「不許童酒入山門」といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。

石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて佇むとき、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた空の奥から小さい星がしきりに瞬をする。句になると思つて又登る。かくして余は到頭上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。むかし鎌倉へ遊びに行つて、いはゆ

祇園趣味

五山 建長寺、圓覺寺、淨智寺、淨妙寺、壽福寺。

る五山なるものをぐるぐら尋ねてまはつた時、たしか圓覺寺の塔頭タツチであつたらう、やはりこんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から黄色な衣を着た頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれちがつたとき、坊主が鋭い聲で「何處へ御出でなさる。」と問うた。余はたゞ「境内を拜見に。」と答へて同時に足をとどめたら、坊主はすぐに「何もありませんぞ。」と言ひ捨て、すたく下りて行つた。

あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭をふりたてふりたて、遂に姿を杉の木の間まに隠した。其の間かつて

一度も振返りはしない。成程禪僧は面白い。きびくし
て居るなどのつそり山門を這入つて見ると、廣い庫裡も本
堂もがらんとして、人影はまるでない。余はその時に心か
ら嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こん
なに洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分
が晴々した。禪を心得て居たからといふ譯ではない、禪の
ぜの字もいまだに知らぬ、唯あの鉢の開いた坊主の所作が
氣に入つたのである。

かうやつて美しい春の夜に何等の方針も立てずに歩いて
ゐるのは實際高尚だ。興來れば興來るを以て方針とする。
興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば得たとこ

ろに方針が立つ。得なければ得ないところに方針が立つ。
しかも誰の迷惑にもならない。

〔仰數春星一二三〕の句を得て石磴を登り盡した時、いやく朧に光る
春の海が帶の如くに見えた。山門に入る。絶句は纏める
氣にもならなくなつた。卽座にやめにする。
石を登んで庫裡に通ずる一筋道の右側は岡躑躅の生垣で、
垣の向ふは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處
で幽かに光る。數萬の曇に數萬の月が落ちた様だと見上
げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでも
居るらしい。
雨垂落の處に妙な影が一行に並んでゐる。木とも見えぬ、

又平 大津繪の祖。元祿頃の畫家。

草では無論ない。感じからいふと又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つてゐる。その影が又本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つてゐる。朧夜にそののかされて、鉦も撞木も奉加帳も打捨て、誘ひ合せるや否や此の山寺へ踊りに來たのだらう。近寄つて見ると、大きな霸王樹である。高さは七八尺もあらう、絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて柄の方を下に、上へくと繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子が幾つ繋がつたらお仕舞になるのか、わからない。今夜のうちにも廂をつき破つて屋根瓦の上まで出さうだ。

あの杓子が出来るときには、何でも不意にどこから出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段々大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は世の中にたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。(漱石全集)

四 蛙

泉 鏡 花

鳴かぬ蛙の傳説は諸國に言傳へられてゐる。大抵これには昔の名僧の話が伴つて居て、いづれも讀經の折、誦念の砌に其の喧噪さを悪んで聲を封じたと言ふのである。坊さ

泉鏡花 名は鏡太郎。小説家。明治六年生。鳴かぬ蛙東京小石川區傳通院にも其の傳説あり。

番町
東京麴町區の
一地域。

んは偉い。蛙が居ても騒がしいぞと申されて鳴かせなかつたのである。番町の私の居るあたりでは犬は吠えても蛙は鳴かない。一度だつて贅澤な叱言などは言はないばかりか、實は聞きたいのである。勿論叱言を言つたつて蛙の方ではお約束の「面へ水」だらうけれど、仕事をして居る時の一寸合方にあつても悪くないのだし、一體大好きなのだ。がちつとも鳴かない、殆ど一聲も聞えないのである。高臺だから此の邊には居ないのらしい。以前牛込の矢來の奥に居たころは、あそこも高臺で、蛙が鳴いても、たまに一つ二つに過ぎないのがもの足りなくつて、御苦勞千萬、向島の三圍（三圍）あたり、瘦腕を組みながら、それでもものんきに歩いた事もあつた。もうかう世の中がせつこましく、物價が騰貴したのでは、そんな馬鹿な眞似はして居られない。併し此の時節あの聲は私は思ひ切れず好きである。處で番町も下六の此の邊だからと云つて一町許麴町の電車通りの方へ寄つた立派な角邸を横町へ曲ると、其處の大溝では、くわつ、くわつ、ころく、ころくと唄つて居る。併し、月夜にしる、暗夜にしる、唯立つて聴くと、三圍田圃をうろついて、狐に魅まれたと思はれる様な時代な事では濟まぬ。誰に何と怪しまれようも知れないのである。然らばと言つて一寸蛙を承りまする儀でと一々町内の差配へ斷るのでは、木戸錢を拂つて時鳥を見るやうな殺風景になる。……と言

向島の三圍
隅田川の左岸。
吾妻橋の上手。

下六
麴町區下六番
町。
作者の居住
地。

あつた。もうかう世の中がせつこましく、物價が騰貴したのでは、そんな馬鹿な眞似はして居られない。併し此の時節あの聲は私は思ひ切れず好きである。處で番町も下六の此の邊だからと云つて一町許麴町の電車通りの方へ寄つた立派な角邸を横町へ曲ると、其處の大溝では、くわつ、くわつ、ころく、ころくと唄つて居る。併し、月夜にしる、暗夜にしる、唯立つて聴くと、三圍田圃をうろついて、狐に魅まれたと思はれる様な時代な事では濟まぬ。誰に何と怪しまれようも知れないのである。然らばと言つて一寸蛙を承りまする儀でと一々町内の差配へ斷るのでは、木戸錢を拂つて時鳥を見るやうな殺風景になる。……と言

清水谷
麴町區の端に
ある地。

里見諱
有島武郎の弟
本名山内英
夫。

白樺
有島武郎志賀
直哉里見諱諸
氏の編輯せる
文藝雜誌。

ふ隙に、何の清水谷まで行けばだけれど、要するに無精なの
で家に居ながら聞きたいのが懸値のない處である。
里見諱さんが、まだ本家有島さんに居られたお知合の初頃
であつた。何かの序に此の話をすると、「庭の池には、幾らで
も鳴いて居る。：：そんなに好きなら捉まへて上げませう。
背戸に飼つて御覽なさい。」と一向つまらなさうな腕白ら
しい事を言つて歸られた。：：翌日だつたか御免下さいと
毫けた聲をして訪れた人がある。「山内から出ましたが」と
言ふのを、私が自分で取次いで、は、あ、これだな、白樺を支那
鞆と間違へたと言ふ名物の爺さんはと領かれたのが、コッ
プに油紙の蓋をしたのに、屹驚したのやら、呆れたのやら、き

よつとしたのやら、途方もないと言つた面をしたのやら、手
を突張つて慌てたのやら、目ばかりばちくして縮んだの
やら、五六匹入つたのを屈けられた。一筆添へてある。「お
約束の此の連中の早い處を引つ捉へてお目に掛けます。
併し、どれも面つきは前座らしい、眞打は追つて後より。「私
はうまいなと手を拍つた。いや、まだコップを片手にして
居る。「うまい。」と膝を叩いた。いや、まだ立つたまゝで居る。
いや何しろ感心した。臺所から縁側に出て仰山に覗き込
む細君を、これ平民の子はそれだから困る。：：食へもので
はないよ。」とたしなめて、「どうだい。」と水盤。も些と大仰だけ
れど、まさか缺摺鉢ではない、杜若を一年植ゑた泥のまゝの

土鉢がある。それへ移して、簀の子で蓋をした。……
 淳さんの厚意だ。聲を聞いたら聞分けて、一匹づつ名でも
 つけようと思ふと、日が暮れてくとも鳴かない。ばちやり
 と水の音もさせなければ、其の晩はまた寂寞として風さへ
 吹かない。……馴染なる雀ばかりで夜が明けた。金魚を買
 つた小兒のやうに、乗しかゝつて踞んで見ると、逃げたぞ、逃
 げたぞ、唯の一匹も影も形もなかつた。……
 俗に、墓は魔ものだと言ふ。嘗て十何匹行水盥に伏せたの
 が一夜の中に消え去つたのは現に知つて居る。雨蛙や青
 蛙がそんな離れ業はしなからうと思つたが、勿論、それだ
 けに蓋も嚴重でなしに、隙があればあつたのであらう。

木下利玄

子爵。

歌人。

明治十九年生。

……

……

大沼の火

柏木

東京市の西郊

淀橋町の字。

木下氏の家は

その四百〇四

番地にあり。

淀橋

柏木の西。神

田上水にかけ

たる橋の名。

今それを町の

名に用ひたり。

二三日経つて、淳さんに此の話をした。丁度其の日、同じ白
 樺の社中で御存じの木下利玄さんが連立つて見えて居た。
 木下さんの方は、淳さんより三四年以前からよく知つて
 居たが、當日連立つて見えた。早速小音曲師逃亡の話を
 すると、木下さんの言はるゝには、大方それは有島さんの池
 へ歸つたのでせう。蛙は随分遠くからも舊の處へ歸つて
 來ます。と言つて話された。嘗て、木下さんの柏木の邸の
 ぼり庭の池の蛙を捉へて、水掻の附元を紅い絹絲で、脚に印
 をつけた幾匹かを遠く淀橋の方の田の水へ放したが、三日
 め四日め頃から氣をつけてもとの池の面を窺ふと、脚に絲
 を結んだのがちら／＼居る。半月ほどの間には殆ど放し

大塚
 清波
 七六
 以上
 一

大塚の火薬庫
 小石川區大塚町に在る陸軍火薬庫。
 東京高等師範學校の前。
 隣りに東京市電氣局電車大塚線車庫あり。

た數だけが戻つて居たとの事であつた。あとで、何かの書物で見たのであるが、蛙の名は「歸る」といふ意から出たのださうである。此は考證じみて來た。就いて思ふのに、本當はどうか知らないが、蛙の聲は随分大きい高いやうだけれども、餘り遠くでは響かぬらしい。有島さんの池は、さしわたし五十間までは離れて居まい。それなのに、私の家までは聞えない。久しい以前だけれど、大塚の火薬庫わき、いまの電車の車庫のあたりに住んで居た時、恰も春の末の頃、少々待人があつて、其の遠くから來る俚の音を廣い植木屋の庭に面した、汚い四疊半の肱掛窓に、肱どころか、腰を掛けて、伸し上るやう

にして、來るのを待つて俚の音に耳をすました事がある。

昨夜も今夜も夜が更けると、こうと響く聲が遙かに聞える、それが俚の音らしい。最も護謨輪などと言ふ贅澤な時代ではない、近づけばからくと輪が鳴るのだつたが、いつまでも唯こうと鳴く。それが離れも離れた、まつすぐに十四五町遠い、丁度傳通院前あたりと思ふ處に聞えては、波の寄るやうに響いて、颯と又汐のひくやうに消えると、空頼みの胸の汐も寂しく泡に消える時、それをすだき鳴く蛙の聲と知つて果敢ない中にも懐かしさに、不埒な凡夫は、名僧の功力を忘れて、所謂「鳴かぬ蛙」の傳説を思ひうかべもしなかつたその記憶がある。

傳通院
 小石川區にある寺の名。
 徳川家康の生母の墓所。

それさへいま思へば空吹く風であつたらしい。(時事新報)

五 兒なくらむ

山上憶良 奈良時代の歌人。天平五年(三三三)没す年七十四。母は上皇の御孫。性詩人。山上憶良の詩集に「兒なくらむ」とあり。新古今和歌集にも採録されている。

おくらゝは今はまからむ兒なくらむ

山上憶良

白銀も黄牙も

僧正遍昭

夏奉宗貞

六歌仙の一。

寛平二年(一五)

五)没す年七

十六。

拾遺集 卷八 雜

久方の月の桂も折るばかり

家の風をも吹かせてしがな。

藤原兼輔

人の親の心はやみにあらねども。

子をおもふ道にまどひぬるかな。

小式部内侍

いかにせむいくべき方もおもほえず

親にさきだつ道を知らねば。

小澤蘆庵

父母のたびなるわれをおもふらむ

まつらむさまのおもかげに見ゆ。

松平定信

月桂樹
月桂皮

藤原兼輔

平安時代の歌人。

承平三年(一五

三)卒す年五

十七。

小式部内侍

平安時代の歌人。

橘道貞の女。

母は和泉式部

小澤蘆庵

京都の歌人。

享和元年(一八

六)没す年七

十九。

松平定信

奥州白河の城

主。

和漢學者。

文政十二年(三

四)卒す年七

十二。

加納諸平
和歌山の歌人
安政四年(三二)
七歳す年五十
二。

大隈言道
英前の歌人。
明治元年(六)
年七十一。

星野恆
漢學者。
歴史家。
文學博士。
東京帝國大學
文科大學教授
大正七年(一七)
年七十八。

うづみ火のあたりのどかにはらからの
まとるせし夜ぞこひしかりける。

小供あつひのうあつひ影かげををるる名な
あげまきがうかるゝ聲も面白し。
加納諸平

ふれく、小雪山つくるまで。

歸り來てねたる童の袂より、
こぼれいでたる花菫かな。
徳川(大隈)言道

六 皇太后宮を悼み奉る 星野 恆

あはれ明治天皇の御事まし〜て追慕の涙未だ乾かざる

野分の風
國の爲科月の
風も心して稻
葉の上はよき
葉の吹かぬ。
霜ふく軍人
大宮の火桶の
にもみくさ人
は霜やくむら
ん。
荒海の上
明治二十四
年(三九)皇
佐守
明保の兩
府へ行幸
けるなり
日よりもつ
船の中やま
ならん霧の
上たる荒海
功臣の跡
明治三十七
年(四二)二
月六日夜
坂本龍馬が
上するなき
給へり。

に、今又皇太后宮の登遐を承りて惶懼の心擣くが如し。臣
民忽ち依恃を失ひ、天地重ねて諒闇に入る。嗚呼、哀しい哉。
恭しく惟るに皇太后宮徳を桃花殿に毓ひて位を長秋宮に
正し給ひ、明治天皇登極の初、日本帝國維新の際、聖業を九重
の深きに翊けて仁風を四海の廣きに敷き給ひ、六千餘萬の
衆庶、皆日月の光を齊へたるを仰ぎ、四十五年の歲月、長く雨
露の恵に浴するを喜べり。あはれ、皇太后宮深仁叡徳、田野
の農民を憫ませ給ひては野分の風に稻葉の亂れを歎かせ
給ひ、出征の將士を思ひやらせ給ひては大宮の中にも霜ふ
む軍人の勞苦を體せさせ給へり。或はかしこき御巡幸の
後を守らせ給ひて、霧立ちわたる荒海の上に御心を摧き、亡

六 皇太后宮を悼み奉る

檀林皇后

嵯峨帝の后、橘嘉智子。

學館院を立つ。

嘉祥三年(五二〇)崩。

仁正皇太后

聖武天皇の皇后光明子の尊號。

嘗て悲田院施藥院を置き以て飢者病者を療養す。

天平寶字四年(二四〇)崩す年六十。

き功臣の跡を偲ばせ給ひて、鳥羽玉の夜の御夢にさへ見そ
なはし給へり。女學校を興し教育を奨めて屢其の庭に臨

白の御夢

の御夢

の御夢

の御夢

み、千鳥の跡をも尋ねさせ給ひて德音萬首の上に出で彝訓

昭憲皇后御筆
昭者を勞り貧民を惠み
災厄に罹れる者を卹
み給へるは、仁正皇太
后の慈範にも勝り給
ふ。後への政の御暇
には、敷島の道を樂し

百世の後に垂る。眞に是、婦道の儀刑にして内教の精粹な

り。いづれの國の坤宮にか又かゝる辱き大御心はおはし

ますべき。あはれ、明治天皇崩御の後、御哀傷は極りなかる

べけれども、今上天皇踐祚ましく、御孝養至らぬくまな

ければ、上下皆寶算の窮なからんことを祈り、内外齊しく慈

光の愈、遠からんことを冀ひ奉りしに、富士山の煙久しく絶

えて靈藥復得べからず、靜浦の波二たび返らずして仙駕遂

に停むるに由なし。臣等世々の史籍を繙き、古を稽へ今を

察するにも、坤徳の雙びなくましますを慕ひまつれり。い

かてか天を仰ぎ地に伏して、聖壽の延へ難きを悲しまざら

ん。乃ち恭しく丹誠を布きて、働地の深哀を擧げ、蕪辭を捧

靜浦
駿河國沼津町
の東。御用邸
のある處。

六 皇太皇宮を悼み奉る

六 皇太皇宮を悼み奉る

元

哭天恸地
天にうたげ
地にうたげ

げて以て在天の慈鑒を仰ぎ奉る。

史學會評議員長文學博士 星野 恆

七 奈良の舊都

藤岡作太郎

藤岡作太郎
國文學者。
文學博士。
東京帝國大學
文科大學助教
授。
明治四十三年
卒す年四十
一。
咲く花の
青丹よし奈良
の都は咲く花
のほふが如
くいま盛りな
り。萬葉集。

咲く花のほふが如く盛なりし奈良の舊都を弔へば、風蝕
雨打、こゝに千又二百年を過ぎたれども、七堂伽藍の偉觀今
に昔の面影を残して、そゞろにありし世を偲ばしむ。春の
日うらくとして、志貴葛城の峰々に霞たなびける時、まづ
法隆寺を訪へ。日東帝國第一の古名刹は、寂々と輪廻して、菜畝
作らるる畑、
麥隴の間に眠るが如し。五層の高塔は、相輪高く張りて、七
寶瑠璃の莊嚴を現じ、金堂中門の殿閣は、畫棟雲を飛ばして

推古式の遺韻を傳ふ。燭を秉つて壁畫に對すれば、諸佛踊
躡として動かんとし、髣髴として名匠の神に接する思あり。



法隆寺金堂壁畫

藥師三尊、止利佛師の釋迦三尊、
夢殿の觀世音、四天王の像、玉蟲
廚子、橘夫人、念持佛、廚子何れか
稀世の珍品にあらざる。
去りて舊都に向へば、春日の森
は緑滴らんとし、若草山には春
色満てり。大佛殿の葺高くそ
の間に聳えて、一抹の霞、藥師寺の古塔を罩めたり。翠柳依
依たる猿澤池のほとりにさまよひて、藤家の氏寺たりし興

七 奈良の舊都

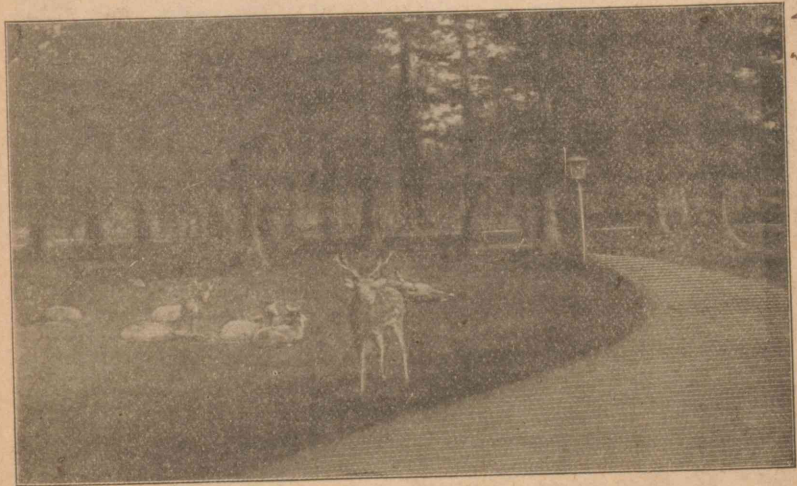
福寺の衰殘を憐み、藥鹿灌々たる神苑をたどりて、三月堂に不空羅索觀音梵天帝釋執金剛神



執金剛神像

等の名作を觀更に

東大寺に五丈三尺の大佛を仰ぎ見れば、聖武天皇の豪華の程も懷はるゝなり。天平勝寶元年のその昔、帝皇后皇太子文武



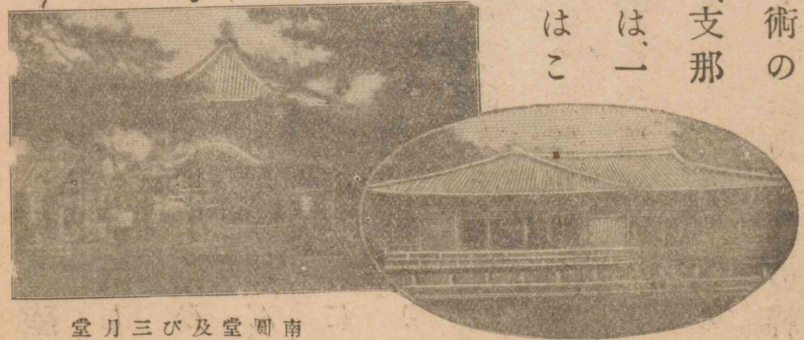
春日神社



法澤池及び福寺

百官を率ゐて大佛を拜し、陸奥に黄金の産出せるを祝して自ら三寶の奴と稱し給ひし盛儀いかばかりなりけん。慈雲西極に靡き、法雨東睡に注ぐ盧舍那佛の尊像を繞りて、花降り、音樂聞え、讀誦梵唄の聲はた雲外に搖曳したりし有様は、實にや極樂淨土も斯くやありけん。正倉院の勅封倉は、今に奈良文化の粹

を鍾め、戒壇院の四天王は天平時代の藝術の精を凝らせり。按ずるに、推古天皇の朝支那との交通公に開けてより、彼の邦の文化は、一瀉千里、潮の如くに傳來し、我が邦の文化は、ここに一大變に際會せり。當時、國運漸く隆昌に赴き、皇威も遠くに及び、國庫も富裕を致しければ、奈良の帝都の經營となり、七世七十餘年、こゝに都して、前代に睹るべからざる燦然たる文化を現出せり。又古事記・書紀の編纂もあり、風土記の撰進もあり、懷風藻と云へる詩集も成り、碩



堂月三び及堂彌南

健陀羅

印度の西北バシヤアル地方の稱。西曆一世紀より三世紀ごろの間は印度固有の形式に希臘羅馬波斯等の形式を加味したる建築彫刻盛んに出來たり。之を健陀藝術と稱す。

儒吉備眞備安倍仲麿も出て、萬葉集と云へる歌集も撰せられ、歌人柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、同家持等輩出せり。帝室の歸依と人民の信仰とに依りて、佛教にはかに興隆し、従うて美術は斐然として章をなしぬ。大伽藍大寺院の建築相次ぎ、彫塑・繪畫は精妙の域に到り、之に伴うて工藝も皆進歩發展せり。されば曾て健陀羅に於て東西特長の融和したりし、もしくは、亞細亞各地に發生したりし美術の精華は、相率ゐて我が邦に注入し、こゝに凝つて奈良朝の美術を作り、わが文化史、わが藝術史に於ける最も誇るべき時代となりき。而して豪華を好み、政教一途の皇謨を實行し給ひし聖武天皇の御宇なる天平時代は、實にその高

潮期なりけり。

嗚呼、一木一草皆これ舊都の遺物ならざるはなし。

流鶯飛

唐招提寺

奈良市の西一

里郡跡村大字

五條にあり。

律宗の本山。

秋篠寺

奈良市の西北

一里餘。

平城村大字秋

篠にあり。

入相を告ぐ。物靜かなる奈良の舊都は今や暮靄の裡に沈まんとするなり。(新體國語教本)

ハ マスク

菊池 寛

見かけだけは肥つて居るので、他人からは非常に頑健に思はれながら、その癖内臓と云ふ内臓が人並以下に脆弱であることは、自分自身が一番よく知つて居た。

菊池寛

小説家。

戯曲家。

明治二十一年

生。

一寸した坂を上つても息切れがした。階段を上つても息切れがした。新聞記者をして居たとき、諸官署などの大きい建物の階段を駆け上ると、目ざす人の部屋へ通されても、息がはづんで急には語を切り出すことが出来ないことなどもあつた。

肺の方も餘り強くはなかつた。深呼吸をする積で息を吸ひかけても、ある程度迄吸ふと、すぐ胸苦しくなつて来て、それ以上はどうしても吸へなかつた。

心臓と肺とが弱い上に、去年あたりから胃腸を害してしまつた。内臓では、強いものは一つもなかつた。その癖身體だけは肥つて居る。素人眼にはいつも頑健さうに見える。

自分では内臓の弱いことを萬々承知して居ても、他人から「丈夫さうだ」と云はれると、さう云はれるから、一種ごまかしの自信を持つてしまふ。器量の悪い人でも、周囲の者から何か云はれると、自分でも「さうか知らん」と思ひ出すやうに。

本當には弱いのであるが、「丈夫さうに見える。」と云ふ事から来る間違つた健康上の自信でも、あつた時の方がまだ頼しかつた。

が、去年の暮、胃腸をひどく壞して、醫者に見て貰つたとき、その醫者から可なり烈しい幻滅を與へられてしまつた。（やういふ言ひを聞かされた） 醫者は自分の脈を觸つて居たが、「おや脈がありませんね。」

こんな筈はないんだが」と、首を傾けながら、何かを聞き入るやうにした。醫者がさう云ふのも無理はなかつた。自分の脈は何時からと云ふことなしに微弱になつてしまつて居た。自分でじつと長い間抑へて居ても、あるかなきかの如くほのかに感ずるのに過ぎなかつた。醫者は自分の手を抑へたまゝ、一分間もじつと黙つて居た後。

「あゝ、ある事はありますがね。珍らしく弱いですね。今まで、心臓に就いて、醫者に何か云はれたことはありませんか。」と一寸眞面目な表情をした。

「ありません。尤も二三年來醫者に診て貰つたこともあり

ませんが。」と自分は答へた。

醫者は黙つて聴診器を胸部に當てがった。丁度其處に隠されて居る自分の生命の祕密を嗅ぎ出されるかのやうに思はれて氣持が悪かつた。

醫者は幾度もく、聴診器を當て直した。そして心臓の周圍を外から餘すところないやうに探つて居た。

「動悸が高ぶつた時にでも見なければ十分なことは分りませんが、どうも心臓の瓣の閉合が不完全なやうです。」

「それは病氣ですか。」と、自分は訊いて見た。

「病氣です。つまり心臓の瓣が缺けて居るのですから、もう繼ぎ足すこともどうすることも出来ません。第一手術の

出来ない處ですからね。」

「命にかゝはるでせうか。」自分はおづく、訊いて見た。

「いや、さうして生きて居られるのですから、大事にさへ使へば、大丈夫です。それに、心臓が少し右の方へ大きくなつて居るやうです。あまり肥るといけませんよ。脂肪心になると、ころりと衝心してしまひますよ。」

醫者の云ふことは、一つとしてよいことはなかつた。心臓の弱いことは豫て覺悟はして居たけれども、これほど弱いとまでは思はなかつた。

「用心しなければいけませんよ。火事の時なんか、駈出したりなんかするといけません。此の間も、元町に火事があつ

元町
東京市本郷區
元町。

水道橋
元町の下より
神田に通ずる
橋。
神田川に架
す。

た時、水道橋で衝心を起して死んだ男がありましたよ。呼
びに来たから、行つて診察しましたがね。非常に心臓が弱
い癖に、家から十町ばかりも駈け續けたらしいのですよ。
貴君なんかも、用心をしないと何時ころりと行くかも知れ
ませんよ。第一喧嘩なんかをして興奮しては駄目ですよ。
熱病も禁物です。チブスや流行性感冒に罹つて、四十度
位の熱が三四日も續けばもう助かりつこはありませんね。
此の醫者は少しも氣安めやごまかしを云はない醫者だつ
た。が、嘘でもないから、もつと氣安めが云つて、欲しかつた。
これほど自分の心臓の危険が露骨ツメのやうなに述べられると、自分は
一種あぢきない氣持がした。

「何か豫防法とか養生法とかはありませんかね。」と、自分が最
後の逃げ路を求めると、「ありません。たゞ脂肪類を喰はな
いことです。肉類や脂っこい魚などは、なるべく避ける
のです。淡泊な野菜を喰ふのですね。」
自分は「おやく」とおもつた。「食ふことが第一の樂みと云
つてもよい自分には、かうした養生法は致命的なものだつ
た。」
かうした診察を受けて以來、生命の安全が刻々に脅かされ
て居るやうな氣がした。
殊に、丁度その頃から、流行性感冒が猛烈な勢で流行りかけ
て來た。醫者の言葉に従へば、自分が流行性感冒に罹るこ

とは、即ち死を意味して居た。その上、その頃新聞に頻々と載せられた感冒に就いての醫者の話などにも、「心臓の強弱が勝負の別れ目」と云つたやうな意味のことが、幾度も繰返されて居た。

自分は感冒に對して、脅え切つてしまつたと云つてもよかつた。自分は出来るだけ豫防したいと思つた。最善の努力を拂つて罹らないようにしようと思つた。他人から、臆病と嗤はれようが、罹つて死んでは堪らないと思つた。

自分は極力外出しないやうにした。妻も女中も成るべく外出させないやうにした。そして、朝夕には過酸化水素水で含漱をした。止むを得ない用事で外出するときにはガ

ーゼを澤山詰めたマスクを掛けた。そして、出る時と歸つた時に、丁寧に含漱をした。

それで、自分は萬全を期した。が、來客のあるのは仕方がなかつた。風邪がやつと癒つたばかりでまだ咳をして居る人の訪問を受けたときなどは、自分の心持が暗くなつた。自分と話して居た友人が、話して居る間に段々熱が高くなつたので送り歸すと、その後から四十度の熱になつたと云ふ報知を受けたときには、二三日は氣味が悪かつた。

毎日の新聞に出る死亡者数の増減に依つて、自分は一喜一憂した。日毎に増して行つて三千三百三十七人まで行くと、それを最高の記録として、僅かばかりではあつたが段々

減少し始めた時には、自分はほつとした。が、自重した、二月一杯は殆ど外出しなかつた。友人はもとより、妻までが自分の臆病を笑つた。自分も少し神経衰弱の恐病症に罹つて居ると思つた。が、感冒に對する自分の恐怖は、どうにもまぎらすことの出来ない實感だつた。三月に這入つてから、寒さが一日々々と退いて行くに従つて、感冒の脅威も段々衰へて行つた。もうマスクを掛けて居る人は、殆どなかつた。が、自分はまだマスクを除けなかつた。

「病氣を怖れないで、傳染の危険を冒すなどと云ふことは、それは野蠻人の勇氣だよ。病氣を怖れて傳染の危険を絶対に避けると云ふ方が、文明人としての勇氣だよ。誰ももうマスクを掛けて居ないときに、マスクを掛けて居るのは變なものだよ。が、それは臆病でなくして、文明人としての勇氣だと思ふよ。」

自分はこんなことを云つて友達に辯解した。又心の中でも、幾分かはさう信じて居た。

三月の終頃まで、自分はマスクを捨てなかつた。もう流行性感冒は、都會の地を離れて、山間僻地へ行つたと云ふやうな記事が、時々新聞に出た。が、自分はまだマスクを捨てなかつた。もう殆ど誰もつけて居る人はなかつた。が、たまに停留場で待合はして居る乗客の中に、一人位黒い布片で、

鼻口を掩うて居る人を見出した。自分は非常に頼もしい気がした。自分はさう云ふ人を見附け出すことに、自分一人マスクをつけて居ると云ふ一種のてれくささから救はれた。自分が眞の意味の衛生家であり生命を極度に愛惜する點に於て一個の文明人であると云つたやうな誇をさへ感じた。

四月となり、五月となつた。道の自分ももうマスクをつけなかつた。ところが、四月から五月に移る頃であつた。また流行性感冒がぶり返したと云ふ記事が二三の新聞に現れた。自分はいやになつた。四月も五月もになつてまだ十分に感冒の脅威から脱け切れないと云ふことが堪らな

く不愉快だつた。

が、道の自分ももうマスクをつける氣はしなかつた。日中は、初夏の太陽が一杯にぼか／＼と照して居る。どんな口實があるにしろ、マスクをつけられる義理ではなかつた。新聞の記事が心にかゝりながら、時候の力が自分を勇氣づけてくれて居る。

丁度五月の半ばであつた。シカゴの野球團が来て、早稲田で試合が連日のやうに行はれた。帝大と試合がある日だつた。自分も久し振りに野球が見たい氣になつた。學生時代には、好球家の一人であつた自分も、此の一二年殆ど見て居なかつたのである。

目白臺
早稲田の北に
ある高臺。

その日は快晴と云つてもよいほど、よく晴れて居た。青葉に掩はれて居る目白臺の高臺が見る目に爽やかだつた。自分は終點で電車を捨てると、裏道を運動場の方へ行つた。此の邊の地理は可なりよく判つて居た。自分が丁度運動場の周圍の柵に添うて入場口の方へ急いで居たときだつた。すと、自分を追ひ越した二十三四ばかりの青年があつた。自分はふとその男の横顔を見た。見ると、その男は思ひがけなくも黒いマスクを掛けて居るのだつた。自分はその男を見たときに、ある不愉快な激動を受けずには居られなかつた。それと同時に、その男に明かな憎悪を感じた。その男が何となく小憎らしかつた。その黒く突き出て居

るマスクから、いやな妖怪的な醜さをさへ感じた。此の男が不快だつた第一の原因は、こんなよい天氣の日に、此の男に依つて、感冒の脅威を想起された事に違なかつた。それと同時に、自分がマスクをつけて居るときは、偶にマスクをつけて居る人に逢ふことが嬉しかつたのに、自分がそれをつけてなくなると、マスクをつけて居る人が不快に見えるると云ふ自己本位的な心持もまじつて居た。が、さうした心持よりも、更にこんなことを感じた。自分があの男を不快に思つたのは、強者に對する弱者の反感ではなかつたか。あんなに、マスクをつけることに熱心だつた自分迄が、時候の手前、それをつけることがどうにも氣恥しくなつて居る

時に勇敢に傲然とマスクをつけて、數千の人々の集つて居る處へ押出して行く態度は、可なり徹底した強者の態度ではあるまいか。兎に角自分が世間や時候の手前、やり兼ねて居ることを、此の青年は勇敢にやつて居るのだと思つた。此の男を不快に感じたのは、此の男のさうした勇氣に、壓迫された心持ではないかと自分は思つた。(菊池寛全集)

九 修善寺便

尾崎紅葉

再啓 昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘撃して川向ふの小山なる頼家公の墓を拜し申候。「時政爺の邪慳何ぞ今に執着して假さざることを斯の如き

修善寺 伊豆國田方郡 修善寺村。温泉あり。
尾崎紅葉 名は徳太郎。小説家。明治三十六年歿す。年三十七。川向ふ 修善寺村を流る。桂川の向ふ。

尾崎紅葉 有名小説家 尾崎紅葉 小説家

多乘る根



尾崎紅葉

や。と見るも傷はしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱を末代にさらされ候事、御身一度は征夷大將軍の顯榮にも上り給ひつる御運に、如何なる前世の御宿業に在しけん、と低回去るに忍びかね候。墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。是こそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は、後人の御墳無きを慨きて假に建てたるものなりとの考證、これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢、亦決して懷古

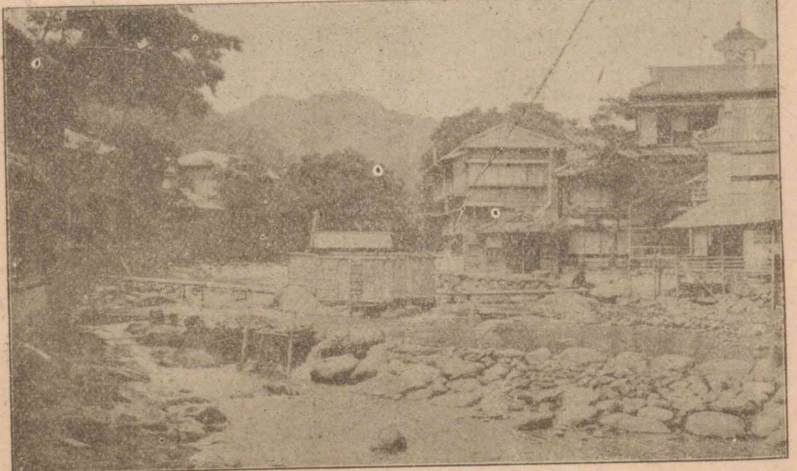
蒲冠者。
源範賴。

の暗涙を斂めしむべきにあらず候。蒲冠者の墳は未だ弔はず、直隣に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申上ぐべく候。

此の日は一日閉居の餘り入浴七度に及び剩へ連夜の按摩尤も勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて終夜眠る能はず、黎明始めて交睫して覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣、玲瓏玉の如く、踊躍して獨鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり、尠からず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀨に蹈入り、ピンピン命拾命拾せ候が、ひまどひまどり候程に水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々とし

獨鈷の湯
桂川の川中に
涌出づ。

て然るべからざる處に長き布を翻し、或は目障の邊に着物を脱ぎ放し、など始終ピンピント安全を妨害致候爲、技師の難澁澁これに過ぎず候ひき。辛辛うじて一照致候へども印畫の安否甚だ心許無く存候。」
それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる坂道の中段に機械を立て候處、崖下なる馬の湯に上下



獨鈷の湯

する四足の往來ありて、屢是に道を讓るべく餘儀無く
せらるゝ爲非空徳の間に速寫機を拵りて立退き申候。
此の寫眞修行の前人の需によりて少々筆を揮ひ申
候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候
處、亭主の才覺紙門に貼りのこしの地紙裁ちて持來り
候に、居然たる檀紙金砂子の好短冊を得候こそ風流こ
の上なく、感心致候へ。

二日の雨にて椎茸出來候へば味淋醬油の附焼に致候。
今は春子のすがれにて、肉薄く氣も亦微には候へ共、山
廚の佳味侮るべからず、平椀中常に幅する所の陣笠の
如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。

本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆草餅
を貰ひ、夜に入りて友人より新杵きねの一折を贈られ候。
胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふ
なかれ。草々不盡。(草紅葉) 紅葉下り者達書。
歌文小説譯之身
數十冊あり

一〇 郭公

郭公

頭光

郭 自由自在にきく里は
人頼るべし
海屋へ三里豆腐屋へ二里
あかく用く本
世の中は何のへちまと思へども
絲瓜
本 端

頭光
本名岸誠之。
寛政八年(一四九
五)没す年七十。
木端
栗柯亭。
眞宗の僧。
安永二年(一四三
三)没す。

朱樂菅江

本名山崎景實。
寛政十年(三)登
公歿す年六十。

四方赤良

本名太田覃。
蜀山人。
漢學者。
狂歌師。
文政六年(三)買
三歿す年七十
五。

郭公鳴きつる方

郭公鳴きつる方
方ながむれ
ばたど有明の
月ぞ残れる。
後徳大寺左大
臣實定。

おろしきつるは暮されもせむ

葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて

色づつ布をよそつらつてまね

よそぎれと見ゆは長寺の飾一紙

ともういもはけきけけけ

早 春 四 方 赤 良

日曆の年が種と其のも碎のうらぐさす
生結の禮者哉見れば大道を

横まをうらぐさすはまをうらぐさす

早 嶺

早嶺が揺りこぎけけ揺りあそび

宿屋飯盛

本名石川雅望。
國學者。
狂歌師。
文政十三年(三)四
五(三)歿す年七十
八。

山の横つらける風がふく

郭公に有明の月をきたる繪に

郭公鳴きつるあそびにけけけ

後徳大寺のあそびの顔

歌 人 宿 屋 飯 盛

歌よみは下をこぎゆられ天地の

動き出さずとたまふものは

一一 鍾 馗

石 川 雅 望

大臣と稱すれども隨身舎人も隨へず。降魔の利劍ありな

狂歌

狂歌

江戸時代

後期

手氏を学

言流上の狂歌

歌よみは下手こそ

力をも入れずして天地を動か
し目に見えぬ鬼神をもあ
はれと思はしむるは歌なり。
古今集序。

から、鎮座せる社も見えず。顔に手足に朱を濺ぎて、拔身を

取つて振舞はす。

若し生酔かと思つて

あれば、榊餅を引窓

から覗く。下戸か

上戸か分くべから

ぬ文武兼備の進士

の垂跡、げに千早振紙、幟、仰げば愈、軒に高し。(あづまなまり)



(觀大畫書) 楯鍾筆耕周

福地櫻痴
名は源一郎
新聞記者
戯曲家
明治三十八年
歿す、年六十
五。
上野
東京市下谷區
にあり。
徳川將軍の廟
所、寛永寺な
どあり。

一二 尼法師 その一

福地 櫻痴

今年五月十五日、上野なる某院にては、彰義隊戦死の諸輩の

谷中
上野の岡の續
き。

爲に二十七年忌の法會を修すと聞え、又谷中なる某寺にて
も同じ法會を行はると聞えたり。余は彼の彰義隊とは初
より方向を同じうせざりしかば、其の諸輩とは關繫も薄く、
加之余が當時の議論は怒に彼の諸輩の怒を招きて、既に其
の刃の霜ともせらるべき危難に遭ひたる事もありき。さ
れどもそは過去の事にて、今は歴史上の物語とはなりぬ。
なごて露ほどの恨も懼も余が心の底に残るべき。殊更か
の諸輩は同じ様に幕府に仕へ同じ様に主家の事を思ひた
る朋輩なり。其の方向を誤りたりと云はゞ云へ、三河育ち
の徳川武士、飽くまで意地を張通すといふ氣象をば先祖よ
り承け繼ぎたるは、旗本八萬騎の多かりける中に、此の諸輩

にぞありける。せめては今日の法會に値ひ、香華をも手向けて彼の冥福を祈らんものをとて、午過ぐる頃より上野谷中に詣で、形の如く其の法會も畢りて寺を出でけり。

根岸の里

上野公園の北麓。下谷區の内。

三河島

上野の北にあり、東京市の東北郊。

初夏の時候とて日脚の永くしてまだ黄昏には三四時間もありぬと覺えければ、此の序に山郭公トクの音づるゝをも聞き、卯の花の咲出づるをも眺めばやと思ひ定めて歩を進め、根岸の里を打過ぎ、たどるとも無く三河島の里の方へ赴きたり。一叢茂る森の中に古寺の屋根の樹間より見ゆるが何と無くゆかしく思はるゝまゝに、畔道を近廻りして寺の門に入りて見たれば、元來大きからぬ本堂のなかば荒れて古さびたるに、住持の僧は庫裡にや居らん、本堂を守る法師

も見えざりけり。さはあれ此の寺の門に入りつる上は、争で其の本尊に禮を行はずしてよかるべきときつと思ひたりければ、恭しく賽錢の禮物を捧げ奉りて禮拜を行ひ、事の次に境内の縦覽を許させ給へと乞ひ、其の黙許を得て本堂の右手樹木ある方へぞ進みたる。此の寺の繁昌なりし頃には庭園を好事に築きたりと見えて、藻草の生茂れる池も夏草の蔓れる阜も其の餘情を留めて中々に見所あり。斯くて此の庭を通り過ぎて生牆の外に出でたれば、こゝは卵塔場と稱ふる寺内の墓地にて、其の檀越に然るべき家の存せるが少なきと覺しくて、新しき墓石は其の數は稀にて、苔むしたる墓の碣のみ累々たり。然るに此の卵塔場の西

の隅なる一樹の柄の木の下に竹の釘貫を結廻したる中に
小さき土饅頭ありて、其の上到一个の地藏尊を安置したり。
其の尊像の石も臺石も、はや古色を帯びたれども、苔もむさ
ず、傾きもせず、其の周圍に雜草一つ生さず、清らかに掃除し
て、今しも汲みたる闕伽の水にて尊像も土饅頭も淨め奉り、
臺石の左右の花立には檜の葉を供へ、中央の香爐に線香を
ぞ焚きたりける。事の體一際目立ちて由ありげに見受け
られたり。此の尊像の前に一個の尼法師、年の頃は四十七
八歳にもあらん、姥櫻のはや老朽ちて、顔には皺の波を處々
に寄せて見る影も無けれども、其の面容眉目の清らかなる
を見れば、他目ながらも昔偲ばるゝ心地したり。肌には鼠

木綿の袷衣を着、墨染の麻の衣を身に纏ひ、香染の麻の袈裟
を掛け、藁蓆を敷き、端然として其の上に坐し、夕日の其の身
を照して焼くが如くなるを更に心にも留めず、小さき折本
の御經を兩手に捧げて、しめやかに無量壽經を讀みたるが、
節も亂れず聲も澄渡りていと貴く聞えたり。

尼法師の後には二人の幼き子あり。一人は七八歳ばかり
の女子にて、縹地に白く菊の花を染出して、點々に紅緑の彩
色したる紬の袷衣を着て、紫縹子に緋の板締縮緬を腹合せ
にしたる帯をやの字に結び、髪は額を切下げて禿にし、頂上
に小さき銀杏返を結ひたるが、面白く、口元しまりて、愛嬌を
含みたり。今一人は五六歳の男の兒にて、眼大きく、頬豊か

にして軀幹の肉も満ち、何さま逞しき武夫の嫩葉とも見ゆるが、木綿袴の上に葛の袴を裾短に着て、件の女子と共にいと大人しやかに楓の如き手を合せて同じ様に彼の地藏尊を拜み居たりけり。

事の體、何とは知られねども、由ありげに見えたるに、余は彼の尼法師等の勤行の殊勝なるに感じ、妨げては悪しかりなんと思ひはかり、心附かれぬ様に去らばやとて一旦は足前に前の生牆ある方へ歩を返したりけるが、さるにても後髪引かるゝ如き念を生じて去りかねたれば、再び生牆の邊に身を寄せて暫く打見たりけるに、彼の尼法師は讀經を終へて靜かに經を懷に納め、念珠を押揉みて口の中にて佛名を

唱へつゝ、尊像を仰ぎ拜しては兩眼に涙を浮べ、絶入るばかりの悲傷を幼兒等に見られんも恥かしと思ひてや、衣の袖もて落つる涙を押拭ひ、後を振向きて二人の兒女に向ひ、「いざ御別の禮拜せよ」と誨へ、共々にぬかつきて名残をしげに尊像の前を立ち、自ら水桶と蓆とを左右の手に持ち、兒女を伴ひて庫裏の方へ赴きたり。

ゆ影

一三 尼法師 その二

福地 櫻痴

余は此の尼法師の體いかにも仔細ある事と思ひたれば、例の好事心にて其の様子聞ききたき儘に、後に續きて庫裏に往き、親しく其の人に面會せまし、さらずば住持の僧に逢ひ

て問はまし。」とは考へしが、「否々、さる無遠慮の舉動すべきにもあらず。」と思ひ反して、此の日はそのまゝ我が家に歸りたり。さるにても此の一場の狀況は兎角心に蟠りて思ひ廻す程ますく、不審を積みたれば遂に二日を経て十八日といふに再び彼の寺に赴き、住持の老僧に面會して彼の地藏尊の由來且は彼の尼法師の事を尋ねたるに、老僧ははたと膝を打ち、よくこそ御尋はなされたれ。いでや其の仔細つぶさに語り聞かせ參らせん。」とて説出していふやう。

「指折り數ふれば、はや二十七年の昔語とはなりて候。頃は慶應四年五月十五日の事なりしが、曉方より梅雨小歇あひどなく、何と無く心細く思はれたるに、正しく上野東叡山に當り

慶應四年
この年九月明治と改元す。

て俄に砲聲の烈しく聞えたり。何事ならんと打驚きて門外に走り出でて見れば、白き煙は森を隔て、彼處此處に立上り、其の上に入叫び、鬨の聲喇叭の音、砲聲と俱に聞えたり。「すはや上野には合戦の始つたるぞや。御山に立籠れる彰義隊をば官軍が總攻にはしつるぞや。早う逃げよ。疾う走れよ。流弾に中つて怪我なせよ。」と老弱男女の別なく我先にと轉びつ、輾うろびつ西へ北へと逃走れる様は、思ひがけなき修羅の衢を唯今眼前に見る心地せられて餘りの怖さ恐しさに、拙僧は急ぎ自ら寺門の扉を鎖固め、あはれ戦争の狼藉を免れさせ給へ。寺中に候人々の命の無事を守らせ給へ。」と本尊に願ねがひ奉りて事の果つるを俟てる外に他事なく

候ひき。扱も其の日の未下る刻に勿體なや東台の山門中堂本坊を初とし奉り、一山の堂塔伽藍みな劫火の爲に黒煙と成りて炎上なし、見る目も空恐しくて候中に、落武者の後を追掛けて、彼方にては射て殺し、ぞ此方にては打つて取りしぞ。と門外にて往きかふものゝ噂するが手に取る様に聞えたり。

かくて申過ぎたりと思ふ頃に庫裏の後に當りて人の呻き惱める聲の唯ならず聞えて候ひければ、愕く心を押靜めて、離僧を召具し、庭傳ひに覗ひて見れば、こは如何に、一個の武者の總身血に染み、痛手数多負ひて息も絶えくゝなるが、裏手の牆根の隙を押破りて逃入りたりと見えて、松の樹の下

に倒れ伏してぞ居たりける。急ぎ寺男ども呼集めて彼の武者を引起させて介抱したるに、年の齡は二十五六歳ばかりなる若武者にて、日の丸の袖章ししつけたるは、聞ゆる彰義隊の一人とは知られたり。

武者は苦しき息を吐きて、水一口賜へ。と乞ひて寺男が與へたる茶碗の水をぐつと呑乾して、御情忝う候。とても事に早く我が首打つて此の苦痛を免れさせたまへ。といひたり。拙僧聞きて、思ひ寄らざる事を宣はせ給ふものかな。

法師の身にて争かで人の命を絶つ法やある。追手の來ぬ間に疾くく、落ちさせ給へ。と勧めたるに、彼の武者は首打振りて、否々、今日の合戦敗北の上は、我が一命固より徳川の御

家へ捧げ奉り候覺悟なれば、今更何ちへか落ち候べき。但し名もなき陪臣どもに首を取られ、徳川家の砲兵組頭塙采女信繁をば何某の若黨が打取つたりと名乗られんこと屍の上の恥辱なれば、心靜かに生害せんとして追取卷きたる官軍の簇る中をたゞ一人にて打破り、根岸口より此所まで落延びて候が、今は腹かき切らんにも痛手に心届かねば、此の上の御芳志には御引導の御介錯を頼み參らせて候なり。苦痛を救うて活すも、また殺して苦痛を免れさするも、同じ佛の慈悲にてはおはさずや。誰にてもおはせ、いざ此の腰刀にて僕が細頸落して給へよ。」と望めども、介錯せんと答ふるものは一人も候はざりき。「あな言ふ甲斐なき人々かな。

さらば苦痛を忍びて自ら生害いたし申さん。引導なして給はれかし。最後の様の見苦しきとて嗤はせ給ふな。」と云ふまゝに、腰なる短刀拔持ちて拙僧が授けたる十念を高らかに唱へ、己れと咽喉にぐさと突立て、がばと打伏し、人々が異口同音の念佛に導かれて其の儘に絶入りたりけり。「此の遺骸いかにすべき。市の廳へや訴ふべき、里正へや告知らすべき。いかゞはせん。」と一寺のもの打寄りて評議したりけるが、拙僧は人々に向ひて、「此の塙某とやらん云へる武士が我が寺の境内にて生害し、圖らずも我等が念佛の引導を受けて往生したるも、淺からぬ因縁ぞかし。然るを其の屍を曝させんこと罪業尤も深かるべし。後日に至り公

の咎あらば、拙僧一人の身に引受けて如何なる御沙汰をも蒙らん。屍は境内の卵塔場に葬り埋めて密に回向供養こそ致すべけれ。」と申したりければ、皆これに同じて、ともに力を合せ、其の夜の中に如法の沐浴せさせ、經帷子に着せ替へて棺に納め、讀經引導の式を密々に執行ひて後に、柩の木の下にそと葬りて其の遺骸を隠して候ひき。但し彼の武者が最後に至るまで着したる衣服、鎖帷子大小及び所持の品は一つ櫃に納め、他日由縁の人に尋ね合はゞ交付申さんが爲に土藏の奥深き處に祕め置きて候ひき。」

一四 尼法師 その三

福地 櫻痴

老僧は澁茶を余に勧め、己も飲みて咽を濕し、更に物語を續けて曰く。

「明くれば同じき十六日の午頃、拙僧に面會を求むる一個の女性あり。座敷に招じ入れて對面したるに、其の人は十八九ばかりなる勝れて麗はしき女性なるが、單衣の裾高く、端折り、胸高に帶引結びてり、しく扮裝ち、眼中血走りて半ば物狂しき顔色を顯したれども、自ら心を制してや行儀正しく初對面の挨拶をなし、詞靜かに拙僧に向ひて、ソレ卒爾にては侍れども、昨日此の御寺に落武者の參られて候はずや。」と尋ねられたり。拙僧はつと打驚き、胸打騒ぎしかど、明らさまに云ふべき事ならねば、否々、さる事は候はず。」と事も無げに

答へたり。「否とよ、上人、御隠しあらんは罪深うこそ候へ。わらは、其の落武者の由縁の者にて候。彼の人の行方生死の程を尋ね究めんとて、今朝まだきより上野・谷中・根岸と彼方此方を尋ね廻りて此の邊まで参りて候ひしが、圖らずも此の御寺の後の籬の外にて此の如く燧袋を拾ひて候ひぬ。此の袋はわらはが手づから拵へて、彼の人の上野の御山に籠らせ給ひし時に短刀の栗形に紐もて結び附けたる品にては候なり。」とて燧袋を示して、「かゝる證據の候上は、隠させ給ふは、中々に心細う覺え候。明したまへ。」とありければ、「さる證據の候上は、仕儀によりては打明くべきがして其の殿の假^ケ名實名は。」「うたてや御僧。かの人の生死の程も

知れぬ中に、彼の人の名乗を輕々しく申す者の候べしや。」「げに尤の御答よな。さあらば、若しも其の殿官軍の爲に討たれ給ひぬと申さば如何に。」「さこそは嬉しう覺え候はめ。討死は豫ての覺悟にて候ひつるものを。」「雄々しき覺悟。天晴候。但し其の殿は拙僧が計ひにて、昨夜官軍の手に降参せられて候ぞ。」「否々、彼の人に限りては力盡きて生捕にせられたらんはいさ知らず、手を束ねて降参する程の腰拔武士にては候はず。但し討死し給ひしか。然らずば生害し給ひつらんは必定と存じ候。」「さ宣ふ上は告げ参らせん。誠は昨日の夕この寺にて生害して果て給ひて候。」「それは定にて候か。して其の證は。」「御覽に入れ参らせん。」とて拙

僧はやをら立つて土藏の中より彼の一櫃を取出して、其の中より肌着、太刀など二品三品取出して女性に見せたりければ、女性は兩眼に堰來る涙をば血汐に染みたる彼の武者の記念の肌着にて拭ひ、顔に押當て、わつとばかりに泣入りしが、氣を勵まして「覺悟の上とは申しながら、生害と承り心紊れし拙き體を顯し、恥かしうこそ候へ。今は何をか包むべき、其の武士こそはわらはが二世までもと契りたる良人にて、しかも旗本八萬騎の其の中に三河御譜代の家柄と知られたる塙采女信繁と申し、武士にて候ひしなれ」と明したり。

拙僧も此の上はとて乞はるゝ儘に、昨日落武者が最期の體

ども落も無く物語りたりければ、女性は歎の涙に咽び、聲曇らせて、「未練とも思召し給ふべきが、今生の別にせめて一度死顔を見させてたばせたまへ」と只管に頼みたり。一旦葬りたる死骸を再び掘發さんは佛家の戒と云ひ、且は憚ある事なれども、女性の心底の程も察したれば、其の夜深更に及びて寺男に吩咐けて密に掘發して、其の死顔に對面を遂げさせて、此の世の名殘を惜ませては候ひき。

女性が歎の中の喜は良人が最期の雄々しかりしこと、殊には臨終の砌に臨み、拙僧の引導に値遇して引接の悲願空しからず、攝取不捨の光明に黃泉の暗を照されて彌陀の淨土へ赴き給ふ事の有りがたさよと幾度とも無く伏拜みては

泣き泣きては伏拜み、再びもとの如くに葬りて後に庫裏に
來り、さて拙僧に對ひて申されけるは、はらは、城戸主水光
高とて三千五百石の知行を領せる旗本の二女にて、名をば
兼と呼び、當年十八歳にて候。去年七月采女のもとにとつ
ぎて候ひしが、間もなく上國の騷にて夫にて候ひし采女は
十二月の初つ方より部下の兵士を率ゐて大阪に登り、伏見
の敗に手を負ひて紀州路より江戸に歸り、其の後は同志の
人々と心を合せて彰義隊に加りて、常に上野に籠りて候ひ
き。
去る十三日の夜、駿河臺鈴木町なる邸に歸り來り、わらはに
對ひて、扱も徳川家の御代も今ははや限と覺ゆるぞ。上野

に籠りていたづらに官軍を引受け、一戦に及ばんこと無謀
の至、迎も勝利の算はある可からずと切に論じて諫むれど
も、同志の輩みな舉つて此の議に服せず、果は我をば操を變
へたる臆病武者なりと嘲り甚だしきは官軍の爲に二張の
弓を引くものならんとまで疑ひ合へり。此の上は力なし、
初よりして御家の爲に、命を捧げんと疾くに覺悟を極めた
る采女、明日にもあれ、明後日にもあれ、官軍より旗差向けら
れなば、眞先駆けて防ぎ戦ひ、太刀の刃の續かん程は、目に餘
る寄手を引受けて切捲り、一陣全く落城に及ば、潔く討死
するか、さらば生害を遂げ、徳川武士の譽を後に留むべし。
和御前は年若き身、殊に御父主水殿には官軍に降り、王臣と

なつて身の安泰を圖られたれば、氣遣あらじ。速かに實家に歸りて、情あらん人に見えさせ給へ。」と申されたり。

「あな情なき御詞かな。如何ならん境までも同じ路をと契りしことは皆偽言にて候ひけるか。武士の討死、忠義の爲の御最期、などて未練に止め奉るべき。御後の御供養はわらはよきに計ひ奉らん。さりながら強ひての討死は武士の不覺とやら承りて候へば、必ずともに早まりて犬死なしたまひそ。」と、胸の痛の碎くるばかりなるを押忍びて勇め勵まし參らせしが、覺悟の上とは云ひながら今生の愛別離苦にてこそ候ひしか。

さる程に昨十五日の上野の戦争、良人の身の上如何ぞと心

も心ならず、落城と聞くと其の儘に邸をそと駈出して上野までひた走りに走りつきたるに、官軍の兵士前後の門を取固めて入らせねば、せんかたなく取つて返し、今朝まだきより再び上野に參り、彼方此方に討死し給へる方々の死骸を見たれども、夫の形の見えざれば、是までは辿りて候ひしなり。それにつけても、是なる唐の鏡は、わらはが最愛したる品にて候ひつるを、十四日の曉に夫の立出で給ひしとき、御身の護に候へば肌に付けさせ置きたまへと奉りしを、最期の際まで持たせ給ひしこそ嬉しうは候なれ。とはいへ、是が記念と成つたるか。」と、流石に猛き女性も歎に前後の辨も無かりけり。

其の後は此の女性七々日が間は忍びやかに毎日佛參して怠らず。中陰百箇日の法會も人目に立たざる様に執行ひ、若干の黄金を持來りて、亡夫の石碑を建てんと乞はれたり。されども其の頃は朝敵たる賊兵の墓碣、明白に建てんこと公への憚ありければ、わざと地藏尊の像を刻ませて標となし、亡き人の戒名は位牌に記し、我が寺の過去帳にも書入れ、其の事の由は密に書留めて祕置きて候なり。

かくて女性は其の翌年亡夫の一周忌と申し、時に、一人の孩兒を懷かせて參詣なし、扱も此の娘こそ亡夫の忘れがたみにて、昨年七月誕生いたして候なれ。夫が最期の砌に佛の道に入らばやとは存じ候ひしが、今日まで猶豫ひしは此

の故にて候ひしぞ。』とて、拙僧を請じて導師と頼み、十九歳と申し、に縁の黒髪をば煩惱の雲と共に切拂ひて、夫の實名と己の呼名とを合せて信兼尼とは法名を附けたり。

かくて其の後この尼法師の信兼尼は道德堅固に佛門の修行をなしたりければ、二十餘年の勤行にて、今は一宗の長老上人たちもをさく、及ばぬ程の碩學とは成らせられたり。東京におはする時は毎月三四回は墓參を怠らせ給はず。

偶、錫を飛ばして諸國を修行し給ふにも、五月十五日には必ず歸り來りて法の如く詣で給ふなり。足下が先の日に見給ひしは即ち其の尊き參詣にては候ひけるぞや。又その時に伴ひ給ひし兒女は、其の男兒は信兼尼の孫の某、その女

兒は實家城戸某の娘、この兩家とも由縁の人々は少なく成りゆきて、今は此の男女二人のみ残りて是も尼が養ひ育て給ふなり。」

右は老僧が長々の物語なり。此の尼法師の身の上および二人の兒女を尼が育める事に就きて猶聞きたる物語もあれど、茲には記さず。尼が今の住居かつは三河島の寺の名も顯に記すは尼の意に悖る恐ありと老僧が止められたる故に、余も其の意に従ひて言はず。唯この尊き尼法師の貞節を記すに筆を止むるなり。(江山烟雲)

夏目漱石

名は金之助。

英文學者。

小説家。

大正六年歿す
年五十一。

一五 カーライルの舊栖

夏目漱石

毎日の様に川を隔て、霧の中にチエルシーを眺めた余は或朝橋を渡つて其の有名なカーライルの舊宅を尋ねた。四階造の眞四角な家である。此の家の石階の上に立つて、鬼の面のノッカーをこつくと敲く。暫くすると内から五十恰好の太つた婆さんが出て来て「おはいり」といふ。最初から見物人と思つて居るらしい。婆さんはやがて名簿の様なものを出して「御名前を」といふ。余は倫敦滯留中、四たび此の家に入り、四たび此の名簿に余の名を記録したが、此の時は實に余の名の記入初であつた。婆さんがこちらへといふから左手の戸をあけて町に向つた部屋にはいる。是は昔客間であつたさうだ。色々な物

が並べてある。壁に畫やら寫眞やらがある。大概はカーライル夫婦の肖像の様だ。後の部屋にカーライルの意匠に成つたといふ書棚がある。それに書物が澤山詰つて居る。それから二階へ上る。こゝにも亦大きな本棚があつて、本が一杯詰つて居る。やはり讀めさうもない本、聞いた事のない本、いりさうもない本が多い。

案内者はいづれの國でも同じものと見える。さつきから婆さんは室内の繪畫器具に就いて一々説明を與へる。五十年間案内者を専門に修行したのでもあるまいが、非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたかうしたと恰も口から出任せに喋舌つて居る様である。しかも其

の流暢な辯舌に、抑揚があり、節奏がある。調子が面白いから其の方ばかり聽いて居ると、何を言つて居るのか分らなくなる。婆さんは人が聽かうが、聽くまいが、口上だけは必ず述べますといふ風で、別段厭きた氣色もなく、何年何月何日をやつて居る。

余は東側の窓から首を出してちよつと近所を見渡した。眼の下に十坪程の庭がある。右も左も又向ふも石の高塀で仕切られて其の形はやはり四角である。四角はどこ迄も此の家の附屬物かと思ふ。

カーライルいふ裏の窓より見渡せば、見ゆるものは茂る葉の木株、緑なる野原及び其の間に點綴セツする勾配の急なる赤

き屋根のみ。西風の吹く此の頃の眺はいとはれやかに心地よし。余は茂る葉を見ようと思ひ、緑の野を眺めようと

思つて實は裏の窓から首を出したのである。



カールライル

首はすでに二遍許出したが、青いものも何にも見えぬ。右に家が見える、左に家が見える向ふ

にも家が見える。其の上には鉛色の空が一面に胃病やみの様に不精無性に垂れかゝつて居るのである。余は首を縮めて窓から引込めた。案内者はまだ何年何月何日の續

きを朗に誦誦してゐる。

カーライル又いふ「倫敦の方を見れば眼に入るものはウエストミンスター、アベーとセント、ポール寺の高塔の頂のみ、其の他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隠見す。」「倫敦の方」とは既に時代後れの語である。今日チュルシーに来て倫敦の方を見るのは家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺めるといふのと大した差違はない。然しカーライルは自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼は田舎に閑居して、都の中央にある大伽藍を遙かに眺めた積であつた。余は復た首を出した。そして彼の所謂倫敦の方へと視線を

延した。併しウエストミンスターも見えぬ、セントポール寺も見えぬ、數萬の家、數十萬の人、數百萬の物音は、余と堂宇との間に立ちつゝある、^{モラトル}漾ひつゝある、動きつゝある。一八三四年のチエルシーとはまるで別物である。余は復首を引込めた。婆さんは默然として余の背後に佇立して居る。

三階に上る、部屋の隅を見ると、冷にカーライルの寢臺が横たはつて居る。青い戸張が物靜かに垂れて、空しき臥床の裡は寂然として薄暗い。木は何の木か知らぬが、細工は唯無器用で素朴であるといふ外に、何等の特色もない。其の上にも身を横たへた人の身の上も思ひ合はせられる。傍には彼が平生使用した風呂桶が九鼎の如く尊げに置かれて

ある。

風呂桶とはいふものゝバケツの大きいものに過ぎぬ。彼が此の大鍋のなかで、倫敦の煤を洗ひ落したかと思ふと、益其の人となりが偲ばれる。ふと首を上げるに壁の上に彼が往生した時に取つたといふ漆喰製の面型がある。此の人だと思ふ。此の巨燧位の高さの風呂に入つて、此の質素な寢臺の上に寝て、四十年間やかましい小言を吐續けに吐いた顔は、これだと思ふ。婆さんの淀みなき口上が電話口で横濱の人の挨拶を聞く様に聞える。階段を下りて勝手口から庭に案内された。例の四角な平地を見廻して見ると、木らしい木、草らしい草は、少しも見え

ぬ。婆さんの話によると、昔は櫻もあつた、葡萄もあつた、胡桃もあつたさうだ。

カーライルが麥藁帽を阿彌陀に被つて、寢巻姿のまゝ銜へ煙管で逍遙したのは此の庭園である。夏の最中には蔭深き敷石の上に、さゝやかな天幕を張り、其の下に机をさへ出して餘念も無く述作に従事したのも、此の庭園である。星明かなる夜、最後の衣服をのみ終つたのち、彼が空を仰いで、「嗚呼予が汝を見るときは瞬間の後ならん」と叫んだのも此の庭園である。

余は婆さんの勞に酬いる爲に婆さんの掌の上に一片の銀貨を載せた。「有難う」といふ聲さへ朗讀的であつた。一時

一七九五

間の後、倫敦の塵と煤と馬車の音とチームス河とは、カーライルの家を別世界の如く遠き方へと隔てた。(漱石全集)

一六 ウェストミンスターとパンテオン

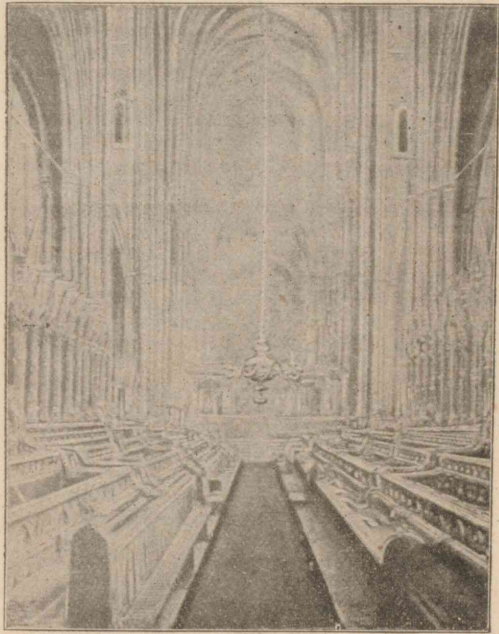
河上肇

倫敦のウェストミンスター寺院は、偉人國葬院とも謂ふべき處である。巴里のパンテオンも、略之に似たもの。

倫敦に最初行つた時は僅か一週間滞在したゞけであるが、其の一週間の中に三度も行つた程、ウェストミンスター寺院は私の氣に入つた。始めてウェストミンスターに行つた時、人々何れも帽を手にせるを見て、西洋の儀禮をば少し

ウエストミ
ンスター寺
院
英國倫敦なる
古き寺。
英國の偉人の
墓多し。
パンテオン
佛國巴里なる
寺。
佛國の偉人の
墓多し。
河上肇
經濟學者。
法學博士。
京都帝國大學
法科大學教
授。

も心得ぬ私でありながら、直に、寺院では帽子を脱ぐものだ
 など氣附いた。それほど全體の空氣が落ちついて居て、如
 何にも人の心を静め
 る感じがした。さう
 して隅から隅まで案
 内者なしに、自分獨り
 で思ふがまゝに、逍遙
 することの出來たの
 は、如何にも悦ばしか
 った。無料では入れぬ處でも、一定の金さへ拂へば、何時で
 も何時までも思ふがまゝに逍遙することが出來た。



院寺 | タス | ヌミ | ト | スエウ

フォーセツト
英國の經濟學
者。
(1808-1884)

經濟學者ではヘンリト、フォーセツトの半身像が此處に在
 る筈であるのに、第一日目には其を見落してしまつた。二
 日目には是非探し出したいと思つたが、容易に見つからぬ。
 それもその筈、往來止にしてある片隅の室の遙か奥の方に
 半身像が懸けてあるのであつた。併し遠くから薄暗い壁
 に懸けてある半身像を兎も角も認め得た位だから、悠々と
 此の寺院の内を逍遙ふことの出來ることも推して知るべ
 きである。進化論で有名な彼のダーウインの葬つてある
 其の床石の上でも、私は様々の事を思ひ浮べながら飽くま
 で佇むことが出來た。ダーウインの半身像の懸つて居る
 すぐ傍の壁には、「エネルギー不滅の法則」を考へ出したジユ

ダーウイン
英國の生物學
者。
(1809-1882)

ジュール
英國の物理學者。
(1814—1889)

ニュートン
英國の數學者、物理學者。
(1642—1727)

ハーシエル
英國の天文學者、物理學者。
(1792—1871)

ワット
英國の機械學者、發明家。
(1736—1819)

ールの爲の記念板がある。

此の牌はジェームス・ブレスコット・ジュールを永遠に記念せんが爲結合したる諸國の人々によりて、茲にニュートン・ハーシエル及びダーウイン等の墳墓に近く置かる。と云ふ牌銘も、私は之を手帳に書きとめることが出来た。



ジェームス・ワット

幾度か私の論文や著書に引合に出した蒸氣機關の發明者ジェームス・ワットの石像もある。ガウンを着て椅子に腰を掛け、左脚を後にひいて右脚を前に出し、紙を膝の上に展べ、左手に其の端を抑へ、

右手にコムバスを握つて居る。臺石の表面を見ると、其には次の如き意味の文字が彫りつけてある。

此の國の國王、諸大臣並に貴族、平民の多くの者ども、此の記念像をジェームス・ワットの爲に建てたり。そは彼の名を永遠に傳へんとてには非ず。彼の名は平和の事業の榮ゆる限、かゝる記念像を俟たずして永遠に傳はるべし。此の像は人間が彼等の最上の感謝に値する所の人人を尊敬することを知れりと云ふ證據を示すために建てたるものなり。

思ふに、彼の産業革命、延いて現代の物質的文明を人間化するれば、そこにジェームス・ワットの塑像が出来る。私は今親

しく其の偉大なる塑像の前に立つて彼の生涯を懐ひ、又産業革命の偉業を思うて、萬感の徂徠するに涙を催さんばかりである。記念像の下に彫りつけてある幾行かの文字も實にゆかしきものである。私は行を追うて丁寧^{ていねい}に其の文句を手帳に寫し取りながら、日本にも若しかゝる場所があるならば、私は子供等の教育のため屢、そこへ連れて行きたいものだと思つた。

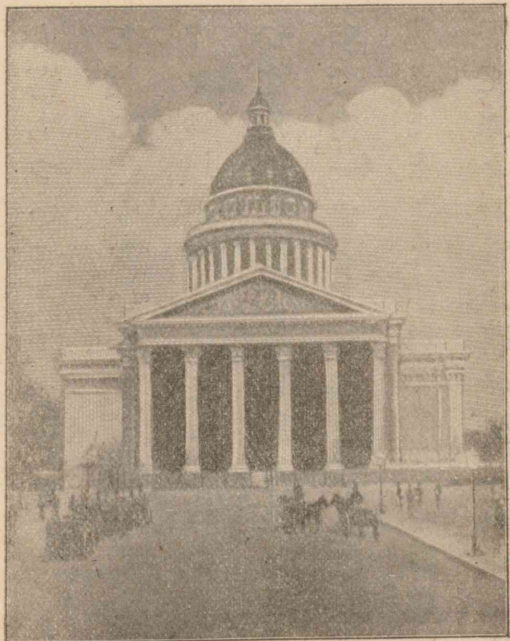
その後、私は巴里に移つて、バンテオンを見に行つた。こゝではその墳墓のある洞窟を見るのに、案内者に就かねばならぬ。時を定めて案内者が觀覽者を集める。其の時それについて入るのである。一人の案内者が何十人かの群を

笑

ルソー
佛國の哲學者。
(1712—1778)
ヴォルテール
佛國の文學者。
(1694—1778)
ユーゴー
佛國の思想家、詩人。
(1802—1885)
ゾラ
佛國の小説家。
(1840—1902)

引連れ、薄暗い洞窟の中を、出來得るだけ急ぎながら、只時折立ちどまつて若干の説明をするだけなので、一分間たりとも落ちついて英雄の墳墓を仰ぎ、追慕の念を催し、懷古の情に耽る暇がない。此がルソーの墳墓である、彼がヴォルテールの墳墓である、こゝにユーゴーが眠り、そこにゾラが眠つて居ると云ふかと思へば、はや先頭は他の場所へと進むので、何一つとして頭に残りやうが無い。もうお仕舞だと思つて、そこに出口がある。戸の外に例の案内者が立つて居て、銘々から思召の金を貰つて居る。皆が金を遣ると、どうんと戸を閉めて錠を下す。それでお仕舞である。次には復、何十人かの見物客を引連れて同じ事を繰返す。此の

如くにして、案内者のポケットは相當に膨れるであらう。私は敢へて一法二法の金を惜しいとは思はぬが、何遍這入



つても同じ事だから、
巴里には七十日も居
たけれど、二度とは行
かなかつた。

此のバンテオンには
かつてミラボトが國
葬された。然るに其

の國葬が營まれてから僅か三年目に議會では、彼の骸骨を掘返して其の代りにマラーを葬ることを決議した。かく

ミラボト
佛國革命時代の
雄辯家。
(1749—1791)

マラー
佛國の革命
家。
(1741—1793)

てミラボトの死骸は或夜此のバンテオンから持ちだして或他の墓地に改葬された。マラーが暗殺された事は當時甚だしく巴里人の血を涌かしたものと見える。然るに此のマラーの死骸も、三ヶ月目に又此處を追出されて、他の墓地に埋められる事に爲つた。えらい事をしたものだ。併しそれが巴里人であり、それがバンテオンである。

考へて見れば、此のバンテオンの墳墓室はやはり例の案内者について、出來得るかぎり遽しく見て廻るべき場所なのである。堂前に建てられてある「考へる人」と題するロダンの作品は裸體の男が左腕を膝に突き掌を以て額を支へて居る銅製の巨像であるが、背面の建築と如何にも不調和に

ロダン
佛國の彫刻
家。
(1804—)

見える。併しパンテオンの歴史、巴里の歴史、從つて佛蘭西の歴史を知る者にとつては、此のロダンの作品こそ替へも動かしもならぬパンテオン堂前の闕くべからざる裝飾である。(祖國を顧みて)

兼好法師

吉田兼好

本姓卜部

觀應元年(三三)

〇寂す年六十

九。

一七 先達

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水ををがまざりければ、心うくおぼえて、或時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。

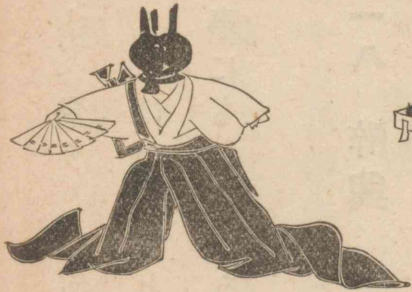
極樂寺・高良などををがみて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、年頃思ひつること果しはべりぬ。

聞きしにもすぎて貴くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそほいなれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。少しの事にも先達はあらまほしき事なり。(徒然草)

一八 醉興

兼好法師

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名残とて、各あそぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平めて舞ひいでたるに、満座興に入ることかぎりなし。暫し奏でて後、抜かんとするに大方抜かれず。酒宴事さめ



浮田一 蕙筆 (華國)

て、いかゞはせんと惑ひけり。と
かくすれば、首のまはり缺けて、血
垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつま
りければ、打割らんとすれど、たや
すくわれず、響きて堪へ難かりけ
れば、叶はで、すべき様なくて、三足
なる角の上に帷子を打懸けて、手
を引き、杖を突かせて、京なる醫師
がりゐて行きけり。道すがら人
の怪しみ見ることに限なし。醫師
のもとにさし入りて向ひ居たり

けん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲
に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教
もなし。」といへば、また仁和寺に歸りて親しき者、老いたる母
など枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺え
ず。かゝるほどに、或者のいふやう「たとひ耳鼻こそきれう
すとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立て、引
きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔て
て首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜け
にけり。辛き命まうけて、久しく病み居たりけり。(徒然草)

最明寺入道
執權北條時
頼。出家して
鎌倉山内の最
明寺に入る。

一九 最明寺入道

兼好法師

平宣時
大佛氏。
北條時政四世
の孫。

平宣時朝臣老の後、昔語に、「最明寺入道、或宵の間に呼ばるゝ事ありしに、「やがて。」と申しながら、直垂の無くて、とかくせ



(藏寺壽萬都京) 頼時條北

し程に、また使來りて、「直垂などの候はぬにや。夜なれば異様なりとも疾く。」とありしかば、萎よえたる直垂うちくのまゝにてまかりしに、銚子に土器取添へてもて出でて、「この酒を一人たうべんがさうぐしければ申しつるなり。下物こそ無ければ人は静まりぬらん、さりぬべき物やあると、何處までも求めたまへ。」とありしかば、紙燭さして、くまぐを求めし程に、臺

所の棚に小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求め得て候。」と申し、かば、「事足りなん。」とて、快く數獻に及びて興に入られ侍りき。その代には斯くこそ侍りしか。」と申されき。(徒然草)

二〇 熊王の發心

隱士松翁

隱士松翁
傳未詳。吉野
朝時代の人物。
大夫判官
五位の檢非違
使尉。

住吉の戰
正平七年。
攝津國住吉に
て楠木正行、
細川顯氏の軍
を破る。

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりける時、左馬頭正儀に度々謀られけるを、くちをししく思ひこめて、過したりけるに、去ぬる住吉の戰に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は我がためにも親の敵にて候へば、いかにもして

阿倍野
大阪市の南、
住吉の北。

討ち侍らん。河内へ越えて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心を許し申さぬことのあるべき。たとひ心を許すことのあらずとも、七年八年ほども仕へ候はゞ、そのうちには討ちぬべき便の争でなからん。御暇をこそ賜はらめ。と涙を流せば、光範もいとあはれに思ひながら、幼ければ、敵の國へやらんも心もとなし。又は命に代りて討たれしものゝ子なれば、かたみとも思ふべければ、と強ひて止めたまひけれども、少し大人しくなりなば、よも近づけたまはじ。をさなくありなるとき参りてこそ、としきりにのぞみければ、力及びたまはで、常に身を放ちたまはざりし刀を賜ひて、これにて本意とげよ。とて、阿倍野まで人あまた添へて

やらせけるに、それよりは我に等しき童一人を具して、赤坂の城に行きてそのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、いかなる人にかおはすらん。と尋ねられて、われは大夫判官光範の侍にて宇野六郎といひけるものゝ小子に熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は去にし時住吉の戦に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追ひうちて領地を奪ひ候へども、光範と力を合せ候へばせんかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり父の跡を弔ひ候はんがためにさすらへ侍り。といひけるを、あはれと聞きて、まづ我が方に伴ひて様々勞りて、後に正儀に、ありつる事を語りて、をさなくは候へど、心のさかくし

くて。など申すに、あはれがりたまひて召寄せたまへり。もとより情ある人なりければ熊王も思ひ附きて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮づかへにけり。十五ほどになりければ、河内の國にて少しなる處を取らせん。といひけれども、いかで、恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。とて辭しにけり。

明くる年の春、父が七周に當りけるに思ひつけて、今宵、正儀を討ちて父の手向にもし、光範の心をも安め奉らん。とおもひたちてありけるに、その日御前に召して、今日は吉日にてあるなれば元服せよかし。とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿よりたまはせたる鎧を

和田和泉守
和田正武。

賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入るまで正儀の御前にありけるが、またふと思ひ出でて、討ち奉らんならば、今宵こそ。とおもひて、膝をおしなほして正儀に目を懸くれば、年頃の情深かりしこと、今日の元服の事など思ひ續けて、いかで情なく討ち奉らん。と思ひかへして心を鎮むれば、父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば。と思ひ定めけれども、何心もなくわたらせたまふ有様を見ければ、御いたはしくて堪へかねけるにや、廣縁に出でて聲をあげて泣き號ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひたまうて、障子を開きみたまへるに、伏沈めるさまのたゞには見えすありければ、いかに。と問はせたまひければ、ありつる心のうちをまをし

往生院
河内國南河内
郡池島村にあ
り。

て、とにかくに、君のため、先君のため、父のために自ら死なん
より外は候はず、とて刀を取りなほせば、ありつる人どもみ
な涙にくれてありながら、いかできはあらん、と、とりつきて
はたらかせねば、力及ばで、その刀にて警おしきり、往生院に
て形をかへ、君より賜はせたる名なればとて正寛法師とぞ
いひける。寺の傍に草の庵を結びて、もしも心のかはるこ
とのありもやせん、とて、往生院の門の外へは出でずして行
ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有様をく
はしく書添へて返しけりとかや。いとあはれなりける事
にこそ。(吉野拾遺)

北原白秋

名は隆吉。

歌人。

明治十八年生。

良寛

歌僧。

天保二年(三三)

一、寂す年七十

四。

△

二一 童の心

北原白秋

越後の良寛禪師は童の心の持主であつた。かういふお話
がある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好き
といふ。これで見ても良寛様がどんなに子供が好きで、子
供たちと遊ぶ事がまたどんなにうれしかつたか、思つても
ほれぐする。

その良寛様も子供たちには随分莫迦にされて盛んに愚弄
られたり、揶揄はれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣
で一生懸命に遊び惚れてゐた良寛様が有難い。
ある時、例の通り、子供たちとかくれんぼをしてゐられた。

鬼になつた良寛様が目を瞑つて、もういゝよといふかはいい聲を一心に待ちうけてゐられる。と丁度日のくれどきで子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちらちら^二點き出すと、子供たちは急に遊びをやめて一人のこらずこそくゝと歸つて了つた。そこは子供だから良寛様も何もうつちやらかしてある。むろん、いくら待つてももういゝよといふものはない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうして到頭夜が明けて了つた。良寛様はそれでも一生懸命だ。心から目を瞑つてやはり同じ處に同じ姿した儘、もういゝよと子供が呼ぶのを待つてゐられた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

それから、またある時のことである。良寛様が今度はかくれる事になつた。そこで見つけられては、大變だといふので、さつそく田圃の稻叢の中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、それはくゝ小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに頭からすつぼりと稻藁をかぶつておど／＼してゐた。すると子供たちはまた例の通り一人のこらずこそこそと歸つて了つたのである。それを良寛様は少しも御存知がない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明けた。稻叢には霜がまつしるに置き、朝の日のぼり始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻たばをやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてゐられる、

「おや、良寛様が」と云ふと慌てゝ、そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。またある日のことである。その良寛様が男の子や女の子達とおはじきをしてゐられた。沙門良寛全傳に「禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆を多く得」と書いてあるから、よほどの乗氣であつたらしい。丁度そのとき誰かゝ入つて來た。そして「おや、良寛様、なか、あなた様はおはじきがお上手で」と褒めると、罪のないこと、良寛様はぼうつと面を赤くして、まるでおぼこ娘見たいに、さも、恥しさうに、そつとその熬豆を膝の下に押しかくしたといふ。

その心の初々しさ。そのきまりのあるさ、恥しさは全く佛の前に子供らしくおとなしく身をへりくだる心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

禪師がいかに天真爛漫であつたかと云ふことをもうひとつお話する。

ある時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で小さな子供がひとり泣いてゐた。良寛様を通りかゝつて「さうしたんだ」と圓い頭をさすつてやると「あの柿が食べたい」と云ふ。「よし、それではわしが取つてあげる、泣くんでないぞ」と云ひながら、やつとこさと木の上に匍ひあがつた。枝につかまつてあれかこれかと探してゐるうちに、それは

全くうまさうな柿の實た、一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛様は夢中になつて、かじるはかじるは、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうにむしやくと食べ惚れてゐる。下にゐる子供こそあはれである。それを見て火のやうに泣き叫ぶとはじめて良寛様氣がついた。さあ、しまつた、これはといふので、慌て、枝をゆさぶつたといふお話。

思うてもその慌てかたのをかしさ、罪のなさ、真正直さ、その子供らしさ、まつたく涙がこぼれるほごうれしいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は榮藏と云つた童のむかしその儘である。それは何ものにも代へがたい、ふたつとない尊い天稟である。

まだ、榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ、或日父親からひごく叩かれたのでつい上目をした。そこでまた、叩かれた。「親を睨むやうな奴は、鰈になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて来ない。さあ、家内中大心配であちらこちらと捜しまはるとある濱邊の岩の上に、悄然と佇んで沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊、どうした。」と云ふと、榮坊曰く、「俺まだ鰈にならないか。」

鰈になると云はれたのでほんとに鰈になると思つて、一心

に海を凝視めて顫へて居た童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。聖心はこの童心を源とする。(洗心雑話)

二三 旅行

山路 愛山

山路愛山
名は彌吉
評論家。
大正六年歿す
年五十四。

風水相撃ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は自然の光景に觸れて、始めて感興涌出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れ

白河の關
都は霞と共
に立ちしかど
秋風ぞ吹く白
河の關。
能因法師。

る歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道には非ず。自然は唯質問を發するもののみ答辯を與へ、來りて見るもののみ教訓を與ふるものなり。試に千山萬水を跋涉し、而して後首を回らして故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より爛熟したる某山某水は始めて遙かなる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくして飛ぶ雲も夕日も波濤も人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も故郷の方の天とし云へば大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は即ち明

日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在り、始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。我は嘗て蜻蜓を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇とを異にせる我は始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に感興を興へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て最も味あるものに非ずや。

放翁
宋の陸游
詩人。

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初ならば、さつき霧島紅の雨を降らし、時もし秋ならば、兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景人をして知らず覺えず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁の歌へる如く、山重水複疑無路、柳暗花明又一村、前面に鬱鬱たる山あり、舵手棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し、忽ちにして山廻り、天濶く、雞犬聲あり、田畝開け、桃源一村人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情景して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら覺むるが如く、眠るが如く、有るが如く

無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に没風流の徒と雖も終に黄金以外眞の娛樂あることを知るに至るべきなり。

朝まだき旅立すれば、駒の歩に連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙後に、颯き清爽の氣身を襲ひ、殘月彼方の山の端にかゝり、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗とが地歩を争ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を畫きて自ら多年風雨の侵蝕せるを示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、

夏草や
芭蕉翁の句。

夏草やつはものどもの夢のあと。

何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、是皆旅行に

羽蟻
與謝蕪村の
句。

非ずんば得べからざるものにあらずや、

羽蟻飛ぶや、富士の裾野の小家より。

一面の平湖鏡の如き浮島ヶ原、其の南を縫へる松林の東海道、總て是一幅の畫圖なり。春天穩かにして、富士風到らず、空氣は漣波だになき水に似たり。忽ち見る羽蟻の飛ぶを、靜中纔かに動あり、駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖づきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數個の山脈は蛇の如く邑を圍み、州を隔て、營々たる人間恰も蟻蛭の如くに見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に

漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりと雖も悟了すれば、浮動の原素に過ぎず。アトムとアトムと相撃ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の状態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の「山川與城郭、漠々同一形」。市人與鴉鵲、浩々同一聲」と歌へるは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは即ち哲學の講壇に坐する者なり。人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。而れども彼は無限の中に妊まれたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠に息らひて

身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、遙かなる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆるこしの海の

浪をわけてもかへるかりがね。

天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき舎多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべきけんや。此の意義に於て自然は人をして無限ならしむるものなり。是旅行より學び得たる自然の教訓に非ずや。(愛山文集)

天つ空
源賴政の歌。

上田敏

英文學者。
文學博士。
京都帝國大學
文科大學教
授。
大正五年卒す
年四十二。

二三 汽車に乗りて

上田敏

赤松の林をあとに、

麻島ひだりに見つゝ、

汽車はいま堤にかゝる。

ほのかなる水のにほひに、

河淀の近きはしるし、

三稜草生ふる河原に、

葦切はけしと噪ぎ、

鶺鴒こそ夏は來らね、

たまぐに百舌の速贄、

篋鷺は何をか思ふ、

しよんぼりと囁に立てり。

紡績の宿にやあらん、

きり、はたり、はたり、ちようく、

杼の音へだたりゆけば、

道祖神まつるあたりか、

鐵道の踏切近く、

繩帶の襪褌のころも、

かち色は飾磨の染か、

乳呑子を負へる少女は、

淺茅生の末黒に立ちて、

「萬歳」と囃し送りぬ。

萬歳はなれにこそあれ、

幾年を生きよ、里の子、

人の世に尊きものは、

土の香よ、國の御魂よ、

偽の市にすまへば、

産土の神にさかりて、

養をかきたる人も、

埴安の郷のつちより、

生えぬきのなれに呼ばれて、

本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、

農人の寢覺に通ふ、

蘇門答刺の香
六國香の一。
スマタラ島より出づる香木。

瀧澤馬琴
小説家。

曲亭馬琴と號す。
嘉永元年(一八二〇)歿す年八十。

禍福は糾ふ

禍之與福兮何異糾纏漢書

人間萬事

馬推枕軒中
噫雨眠元僧

禍は福の倚

福分福之所倚福分福之所伏孰知其極老子

犬塚信乃
八犬士の一。

名は成孝。孝の字の玉を有す。

古河

下總國結城郡古河町。

古河公方足利成氏の居りし處。

村雨

信乃の父犬塚番作が成氏の兄春王より預りたる名刀。

信乃の知らぬ間に悪漢にすりかへられたるなり。

犬飼見八

八犬士の一。信の字の玉を有す。

微かなる土のおとづれ、
なつかしき母の聲あり。
晝さがり草の香高く、
松脂のほひまじりて、
地の胸の乳房に溢る。
蘇門答刺の香も及ばじ。

忽ちに鐵のにはひす、
鳴神の落ちかゝること、
汽車はいま橋に轟く。
桁構眼路をかきりて、
ひとり見る蛇籠の礫。(あやめ草)

二四 芳流閣上の奮闘 瀧澤馬琴

古の人謂はずや「禍福は糾ふ纏の如し。」人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、將禍の伏す所、

彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言記念の名刀、心にしめつ身につつけつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、はるく古河へ齎して、名を揚げ、家を興すべかりしその福は禍とふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし。憾をこゝに釋く由もなく、事急にして、意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして、月來獄舎

に繋れし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて怒に擇み出されつ、他の憂を身の面目に今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱をわたる敷瓦は凸凹隙なく波に似て、下には大河滔々たるこゝ生死の海に入る流は名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫を絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれつなぎとめんと、颯の樹傳ふ如くさら〜と登りはてたる三層の屋根にはまぶしさ

す由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、瞰まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。

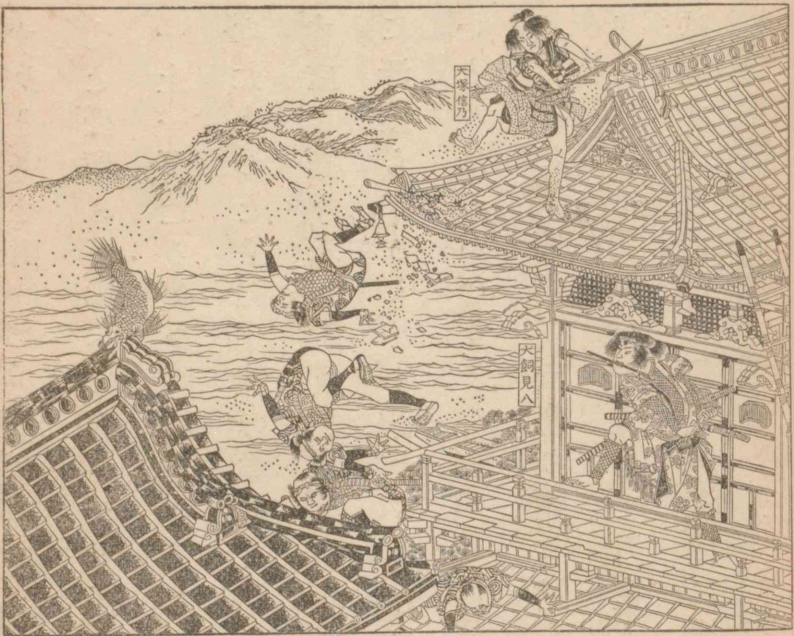
成氏朝臣
古河公方足利成氏。
横堀史在村成氏の老臣。

廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦只閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、鎗長刀を晃かし、或は箭を負ひ弓杖突立て、組んで落ちなば撃ちとめんとて、項を反らして之を觀る。加之外のかなたは、綿連として杳かなる河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならねど、羅に入りぬ、獸ならねど、狩場に在り。三寸息

墨氏
墨翟。周代の人。宋に仕ふ。
魯般
公輸般。周代の人。楚に仕ふ。

膳臣巴提便
 飲明天皇七年
 百濟に使せし
 とき虎穴に入
 りて虎を刺殺
 す。
 富田三郎
 和田義盛の
 士、源實朝の
 面前にて長三
 尺方七寸の大
 鹿角二箇を一
 度に折る。

絶ゆれば事みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。その時、信乃思ふやう「初層・二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を斫りおとしつる後は絶えて近づく者なきに、今唯ひとり登りきぬるはよに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一個の敵なり、ひつ組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せん。」と血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如き方桴に立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう「かの犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりともも搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舎の中よりこの



芳流閣上の奮闘 (傳犬八見里總南)

役義に擇み出されしかひもなし。からめとるとも、撃たるとも勝負を一時に決せんものを。と思ひにければちつとも擬議せず、「御詫さふ。」と呼びかけて、持つたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方桴の左の方より進み登りて、組まんと

すれど、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさず打こむ刀尖をさゝへて流す一上一下、迂る蔓を踏みとめてしきりに進む捕手の秘術、あなたもおとらぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主従士卒は手に汗握らざるもなく、またゝきもせず氣を籠めて見るめもいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣いやまして刀尖より火出づるまで寄せては返す太刀音かけ聲、兩虎深山に挑むとき、鏗然として風起り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。

春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなるいと高き閣の棟のうへに死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八が被籠の鎖、肱當の端を裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痕を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて撓まず、去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に眉間を望みて、礎と打つ十手を丁と受けとむる信乃が刃は鏢際より折れて遙かに飛びうせつ。見八得たりとむずと組むを、そがまま左手に引着けてかたみに利腕しかととり、振り倒さんとえいごゑあはして揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏

亡らして河邊の方へころ／＼と身をころばし、覆車の米苞坂より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣に削りなしたる蔓の勢とゞまるべくもあらざめれど、かたみにとつたる掌を緩めず、幾十尋なる屋の上より末遙かなる河水の底には入らで、程もよし、水際に繋げる小舟の中へうちかさなりつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪にざんぶと音す水煙纜ちようと張りきつて射る矢の如き早川の直中へ吐出されつ。しかも追風と退く潮に誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。(南總里見八犬傳)

二五 松の下露

さる程に
後醍醐天皇元
弘元年九月十
三日

十善
殺生 偷盜 邪淫 不戒 不飲 不食 不語 不坐 不臥 不視 不聽 不嗅 不嘗 不飲 不食 不語 不坐 不臥 不視 不聽 不嗅 不嘗

さる程に、類火東西より吹かれて餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め參らせて、宮々卿相雲客みな徒跣なる體にて、何處を指すともなく、足に任せて落ち行きたまふ。此の人々、始め一二町が程こそ主上を扶け參らせて前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第にわかれ／＼になりて、後には只藤房季房二人より外は主上の御手を引き參らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせたまひて、そのことも知らず迷ひいでさせたまひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせたまはぬ御歩

有王山
山城國綾喜郡
にあり。

なれば、夢路をたどる御心ちして、一足には休み、二足には立止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させたまひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせたまひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせたまひけり。

藤房も季房も三日まで口中の食を断ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなるめにあふとも逃れぬべき心ちせざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に現の夢に臥したまふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと思召されて木のかげに立寄りさせたまひたれば、下露のはらく

と御袖にかゝりけるを主上御覽せられて

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠れがもなし。

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん、頼むかけとて立寄れば、

なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道、松井藏人二人、此の邊の案内者なりければ、山々峯々残る所なく、捜しける間、皇居隠れなく尋ねいだされたまふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、「汝ら心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ」と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、「あはれ此

内山 大和國山邊郡
朝和村之内
永久寺
般湯 夏臺の禁王湯を
夏臺に囚ふ
夏臺の名
越王 越王句踐吳王
夫差に破られ
會稽山にて降
る

兩大將 大佛貞金
金澤貞將
持明院新帝
光嚴天皇

の君を隠し奉つて義兵を擧げばや」と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかりてもだしけるこそうたてけれ。俄の事にて綱代の輿だになれば、張輿の怪しげなるに扶け載せ參らせてまづ南都の内山へ入れ奉る。其の體、只般湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。之を見る人ごとに、袖をぬらさずといふことなかりけり。十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞二千餘騎にて路を警固仕りて主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日、關東の兩大將、京に入らずしてすぐに宇治へ參り向うて龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡したまはつて持明院新帝へ

内侍所 八咫鏡

參らすべき由を奏聞す。主上藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握るものありといへども、未だその三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の守とならせたまはぬことあらじ。寶劔は武家の輩もし天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させたまはんずるために、暫くも御身を放たるゝことあ

るまじきなり。と仰せられければ、東使兩人も六波羅も辭なくして退出す。

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、前臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に逗留あつてぞ六波羅へは入らせたまひける。

日來の行幸に事かはりて鳳輦は數萬の武士に打圍まれ、月卿雲客はあやしげなる籠輿傳馬に扶け載せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へと急がせたまへば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸、北極の高きに坐して百司禮儀の装をつくろひしに、今は白屋、東夷

天上の五衰

諸天命欲終時五死相現

一華冠萎

二腋下汗出

三蠅來著身

四見更有天

坐已坐處

五自不樂本座

人間の一炊

邯鄲の邸舎にて黄粱を炊ぐ

間に盧生が見たる富貴五十年の夢

中宮

藤原禮子

大政大臣藤原實兼の女

の卑しきに下らせたまひて萬卒守禦の嚴しきに御心を惱まさる。時移り事去り、樂盡きて哀來る、天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思しめし出す御事多きをりふし、時雨の雨一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ、
音をきくにも袖はぬれけり。

四五日ありて中宮の御方より御琵琶を遣はさるゝに御文あり。御覽すれば、

思ひやれ、塵のみつもる四つの緒に
はらひもあへずかゝる涙を。

引返して御返事ありけるに、
涙ゆるる半ばの月はくもるとも、

ともにみし夜の影は忘れじ。(太平記)

二六 橋辨慶

前シテ辨慶
後シテ同
トモ 従者
子方 源牛若
處 京都
時 六月
願の仔細有つて、五條の天神へ、丑の時まうでを仕候。今日
満參にて候程に、唯今參らばやと存候。如何に誰かある。
トモ調御前に候。「シテ」五條の天神へ參らうずるにてあるぞ。
其の分心得候へ。「トモ」畏まつて候。又申すべき事の候、昨日
五條の橋を通り候處に十二三ばかりなる幼きもの小太刀

前シテ辨慶
後シテ同
トモ 従者
子方 源牛若
處 京都
時 六月
西塔 比叡山の西
塔。五條の天神
京の五條の通
にあり。

にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥のごとくなる由申候。
まづ、今夜の御物詣は、思召し御止りあれかしと存候。
シテ言語道斷のことを申すものかな。たとへば天魔鬼神な
りとも、大勢にはかなふまじ。おつ取りこめて討たざらん。
トモおつ取りこむれば不思議にはづれ、敵を手元に寄せ付け
ず。「シテ」手近く寄れば、「トモ」目にも、「シテ」見えず。「典神變奇特
不思議なる化身のものに寄せ合せ、かしく御身討たすら
ん。都廣しと申せども、是程の者あらじ。げに奇特なる者
かな。」
シテ調さあらば今夜は思ひ止まらうずるにて有るぞ。いや、
辨慶ほどの者の聞逃げは無念なり。今夜夜更けば、橋に行

き、化生の者を平らげんと。」地ゆふへ程なく暮方の雲の氣色も引きかへて、風すさまじく更くる夜を、遅しとこそは待居たれ。」

牛若さても牛若は母の仰の重ければ明けなば寺へ上るべし。今宵ばかりの名残なれば、五條の橋に立出でて、川波添へてたちまちに、月の光を待つべしと、一聲ゆふ波の氣色はそれか、夜嵐の夕へ程なき秋の風。」地面白の氣色やな、そゞろ浮立つ我が心。波も玉散る白露の夕顔の花の色、五條の橋の橋板をとゞろくと踏みならし、音も靜かに更くる夜に、通る人をぞ待居たる。」

シテ詞既に此の夜も明方の、山塔の鐘もすぎまの雲の光かゞ

やく月の夜に、着たる鎧は黒革のをどしにをどせる大鎧、草摺長に着なしつゝ、素より好む大長刀、真中取つて打ちかつき、ゆらりと出でたる有様如何なる天魔鬼神なりとも面を向くべきやうあらじと、我が身ながらも物頼もしうて、手に立つ敵のこひしさよ。」

牛若川風もはや更け過ぐる橋の面に、通る人もなきぞとて、心すごげに休らへば、」シテ辨慶かくとも白波のたち寄り渡る橋板をさもあらゝかに踏みならせば、」牛若牛若彼を見るよりも、すはや嬉しや、人來るぞと、薄衣猶も引きかづき、かたはらに寄りそひたゞずめば、」シテ辨慶彼を見附けつゝ、言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり、我は出家の事なれば、

思ひ煩ひ過ぎて行く。

牛若牛若かれをなぶつて見んと、行違ひざまに長刀の柄元をはつしと蹴上ぐれば、「シテすは痴者よ、物見せんと」地長刀やがて取直し、いで物見せん手並の程と、切つてかゝれば、牛若は少しも騒がずつゝ立ち直つて、薄衣引きのけつゝ、静々と太刀拔放つて、つゝ支へたる長刀の切先に太刀打合せ、つめつ開いつ戦ひしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るとぞ見えしが、たゞみ重ねて打つ太刀に、さしもの辨慶合せ兼ねて、橋桁を二三間、しさつて肝をぞ消したりける。あら物々し、あれ程の小姓一人を切ればとて手並にいかで洩すべきと、長刀柄長くおつ取りのへて、走り懸つてちようと切れば背



けて右に飛びちがふ。取直して裾をなぎ拂へば、踊りあがつて足もためず、中を拂へば頭を橋地に付け、ちゞに戦ふ大長刀、打落されて力なく、組まんと寄れば切拂ふ、すがらんとするも便なし。せん方なくて辨慶は、希代なる少人かなとて、あきれば「ロンギ地ぞ立つたりける。」

ロンギ地不思議や、御身たれなれば、まだいとけなき姿にて、かほど

九條
牛若の宿所。

正岡子規
名は常規。
俳人。
明治三十五年
歿す年三十六

けなげにましますぞ。委しく名乗りおはしませ。」牛若今は
何をか包むべき。我は源牛若。」地義朝の御子か。牛若扱汝
は。地西塔の武藏辨慶なり。」互に名乗合ひ、降参申さん、御
免あれ。少人の御事。我は出家。位も氏もけなげさも、よ
き主なれば頼むなり。麓忽にや思し召すらん、さりながら、
是又三世の奇縁の始め、今より後は主従ぞと、契約堅く申し
つゝ、薄衣かつかせ奉り、辨慶も長刀打ちかついで、九條の御
所へぞ参りける。(觀世流謠曲)

二七 國ざかひ

雪のこる頂ひとつ國ざかひ。

正岡子規

内藤鳴雪
名は若行。
俳人。
漢學者。
弘化四年(三六)
生。

高濱虚子
名は清。
俳人。
小説家。
明治七年生。

藤田東湖
名は彪。
水戸藩士。
勤王家。
安政二年(三五)
辛す年五十。

地に落ちし葵踏みゆく祭かな。
朝鳥の來れば嬉しき日和かな。
獨言ぬるき湯婆をかゝへけり。
夕月や納屋も既に梅のかげ。
矢車に朝風つよき職かな。
元日や一系の天子富士の山。
金龜子なげうつ闇の深さかな。
部屋々々にくぼる行燈や鹿の聲。
遠山に日の當りたる枯野かな。

内藤鳴雪

高濱虚子

二八 人の問に答ふ

藤田東湖

一兩年以來十數度の貴翰、尙又時々御惠投ものに預り、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何故、右様御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顔の至に御座候。

慎中

弘化四年より嘉永五年まで水戸に謹慎を命ぜらる。

さて慎中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脱し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻大白を傾け候暇はこれあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答に及び候。

弘道館

水戸藩の學校。天保十三年徳川齊昭これを開く。

一、先年弘道館にて貴兄と面貌はたしかに相覚え候。謂はゆる嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩

文等拜見尙又御噂承知致候へば、近來益御研精の由、憚ながら感心仕候。老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の



藤田東湖

學者は寥々に御座候間、國家のため御勵精尤に存候。僕などは罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地の一棄人に候間、理窟がましきこと

は一切申すまじと心がけ候へども、大義未だ曾て君臣を忘れざる至情もだし難く、且は度々の御細書、御深意をも

弘道館記
徳川齊昭の撰
し且書せるもの

推察致し、旁心事ほゞ吐露仕候。申すまではこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、却て無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其效」と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世、親孝行の様なれども、御奉公は出来ぬ風の人も相見え、又御奉公出来候様にても、父子の中とくと致さざる向も相見え候。これら決して聖人の道にあらずと存候。又少々書を読み候へば何か仔細らしき顔色を致し、言語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劍槍等の藝一切出来申さず、文弱白面の書生と相成候儀、毛唐人ならばそれにて宜しきか

も相知らず候へども、かりそめにも神州尙武の域に生れ且は武家の飯を食ひ候者は、右様白面の書生は、風上へも置きかね候事勿論に御座候。武人の愚にも困り候へども、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申すべさか。しかし成るべきだけは、文武岐れず兼備これありたき事、是亦勿論に御座候。學問・事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか／＼難物なり。僕が輩、頌白に相成候へども、今以て學問・事業一致の場合に相成申さず、及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候はゞ、貴兄などは妙齡の御事ゆゑ必ず學問・事業の

十七史
 前漢書 後漢書 三國志 晉書 宋書 南齊書 陳書 梁書 魏書 周書 北齊書 北周書 隋書 唐書 五代史 十一史
 宋史 遼史 金史 元史 加ふ。

一致も御出来なされ候はん。随分御研精御尤に御座候。一、讀書は博きを貴び候へどもうはすべりいたし候うては、何程萬卷を讀み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる「眼光紙背に透る。」と申すごとく讀みたき事に御座候。次第々々に後の世に生れ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成、末が末に相成候は、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これあり候故、一概には申兼候へども、歴史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて

東坡
 某讀漢書、至
 是凡三經、手
 鈔矣。初則一
 段事鈔、三字
 爲題、次則兩
 字、今則一字。

讀み候方、格別に益を得候様相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尙又御勘考御尤に存候。

金風飄飄、釀成佳氣、薄、滴彩林梢
 坐三石上、長靜、一輪明月照丹心

藤田東湖筆

一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位にこれなく候うては、經書も歴史も本當に解し申されず候間、随分御餘力には御修行御尤に存候。但し近來、長短句にてごまかし候詩流行致候處、唐詩選の序にも、李太白長語を

李太白長語
七言古詩惟子
美不_レ失_レ初唐
氣格、而縱橫
有_レ之、太白縱
橫、往々飄忽
之末、固雖_レ長
耳、英雄歎人

東夷の人
日本國夷人物
茂卿拜手稽首
敬題。
贊孔子真。

用ひ候事を評して、「英雄人を欺くのみ」と申候。今の流行は凡庸人を欺くとも申すべく候。右の類は先々御稽古これなき方と存候。
一、慶元以來、人物林の如く、豪傑も追々に出で候處、其中にて、仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など、皆畏るべく存候。しかし右の内、徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀、不届至極に御座候。新井も才氣絶倫に候へども、東都を張立て候志は悪むべく候。さ候へば、今に在つては右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致し、孔子の遺意に叶ひ候様、御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者、やゝもすれば唐人の事は丁寧に

司馬溫公

北宋の司馬
光、字は君實、
諡して溫公と
いふ。

朱文公

南宋の朱熹字
は元晦、諡し
て文公とい
ふ。

韓魏公

北宋の韓琦字
は稚圭、魏國
公に封ぜら
る。

申し、司馬溫公、朱文公、韓魏公などと稱へ、さて新田義貞が云々、楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右様の人をば僕は、毎々和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外當世の學風、其の弊少からず候へども、拙も書中に盡しかね候故、まづその一端を挙げ候のみに御座候。僕は最早貴地などへ出で候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參、御對面等にて御歸郷も御自由ゆるゑ、もし來春など一寸も御歸郷に相成候は、種種存候だけの事は御切磋商申すべく候。
先は今日は前文御申譯かたぐ、一書を裁し候事に御座候。しかしながら、御覽の通り亂筆さぞ御讀みかねなさ

れ候はんと閣筆致候。以上。

性格劇

性格劇

性格劇

坪内逍遙

名は雄藏。

英文學者。

戯曲作家。

文學博士。

安政六年(一五)

年生。

ひ生。

長柄堤

攝津國西成郡

豊崎村あたり

の長柄川の

堤。

茨木

攝津國三島郡

茨木町。

▷

二九 長柄堤の訣別 その一

坪内逍遙

槃を食ふことは難しと雖も、未だ如かず、生きて別るゝこ
との難かるには。 苦きことは心肝にあり。 晨雞再び鳴
いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。 はや分れ
ゆく横雲や、残んの星を一つづつ鐘が消し行くいな、のめ
の長柄堤に秋闌けて、一村蘆に風黒く、有明凄き大川水逝
きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白けゆく干草が蔭の蟲の
聲、哀はいとゞまさるらん。 片桐市正且元は居城茨木へ
立退かんと、従ふ郎黨一百餘人、邸を立つて大阪城をあと

になし、列を正してしづく、と長柄堤に差懸る。 其の時
市正手綱をひかへ、従兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近
づけ、あらためていひけるやう、

市、いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに
伊豆守が殘兵ぬけがけなし、討手の荒膽を挫ぎしたため、備あ
りと見違へしか、また寄せ來らん模様もなく、剩へ夜に入り
ては、外に在りし家臣まで、變を聞きつけ馳せ集り、血氣のと
もがらこれに氣を得て、薪に油を濺げる如く、弓鐵砲とひし
めき騒ぎ、命を聽かばこそ、打棄ておかば、珍事に及ばんも圖
りがたく、暫く彼等をなだめん爲、一先茨木へ引退き、後事を
圖らんとはいひしものゝ、昨夜仄かに傳へ聞けば、織田入道

も君を見限り、俄に京表へ退去の由、お家の危機いよく、迫
んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らんこと必定なり。
それにつき所存あつて、先刻今村三右衛門を木村が邸へ走
らせたり。追付け三右が吉左右あらん。我はこれにて相
俟つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮
の間違なきやう、一足先へ參らるべし。」

と言葉のうち、はるかにしたひ駈けくる足音。

圭「あの足音は、たしかに今村。」市「三右衛門か。」今「我が君こ
れに御座ありしか、長門さまには追付けこれへ。」市「ほ、太
儀太儀、満足なるぞよ。しからは主膳は一足先へ。三右衛
門もこゝかまはず、我はこれにて相俟つべし。」圭「仰ではご

ざりますれど、油斷ならざる當節柄、如何なる變事あらんも
知れず。」今「只御一人此のところに、御座あらんは心元なし。」
圭「せめて我々。」二人「兩人は。」市「はて入らぬ遠慮。氣づかひ
致すな。往けく。」圭「ちやと申して。」市「はて往けと申すに。」
二人「は、あ。」

顔見合せて是非なくも、主膳をさきに三右衛門、心残して
行き過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明が
た、時に囀る小鳥の聲、川霧やうく、霽れゆけば、遠樹模糊
として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、く
たかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空には似ぬや入る

方の月すさまじき柳陰、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し、をちかたにおぼろくとあらはるゝ名におほさかの四衢八街、悄然としてさびしげに一棟たかく聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下薨れさせたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ離れ、取りわけ加藤肥州逝去の後、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有様唇齒己に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池も其の甲斐なく、」

いひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや、此の且元がする事爲す事いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は東西不和の導火となり、毘廬舍那佛の御胸にも大慈大悲は宿らざるか。御家とこしなへに康かれ。」と祝ひし文字が本となり降つて涌いたる難題は、只前門の虎にして後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、

市「是しかしながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循

千姫君
徳川秀忠の
女。秀頼の室
となる。

して大事を誤り、空しく關東の毘に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元が此の腸はちぎるゝばかり償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことどもちやなあ。」

三〇 長柄堤の訣別 その二

坪内逍遙

すかしながむる折こそあれ、遙に聞ゆる蹄の音程もあらせず、只一騎殘霧つんざき一散に汗馬に宙を走り來る木村長門守重成、

長「市正殿に候な。」 市「長門殿待ちかねしぞ。」

いふ間にかけ寄るくつわづら。右手におり立ち顔見合せ、言葉はなくてそゞろにもまづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて老いゆく秋の淋しさを長柄堤に留むらん。

長「最早豊臣の御社稷も愈末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せ

織田入道

織田信雄常真

入道

大野

修理亮治長

渡邊

内藏介胤

らるゝとは。某圖らぬ事よりして端なくも御母公の御嫌
 疑蒙り出仕を遠慮のそのひまに思ひ懸けぬ珍變あり。續
 いて足下たまに御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參
 入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似氣なく
 激論の末、席を蹴立て、只今退席ありしとばかり。あとは亂
 脈無法の評定、御母公の威を笠にきる大野、渡邊等が我意暴
 慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹か
 つ切らんと、二度まで刀の欄に手は懸けしが、貴殿が日頃の
 教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得
 ざりし言ふ甲斐なき。」

悔むを且元押宥め、

市いちいしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申し、如く、お家
 の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の
 所爲にあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨に徹すと雖
 も今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退
 去の事關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日ま
 では去就を定めざりし織田殿、己に心を變じ、京表へ退身せ
 られしからは城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。
 大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こ
 そ肝要なれ。」
 長ながして籠城の計畫とは、何を以て先とすべき
 か。市いちされば、今御城に兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛
 將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮

九度山
紀伊國伊都郡
の山村。
真田安房守
名は幸昌。

り、萬一の備をなし置きたり。」長して其の智謀の將とは。」
市「いま九度山とさに隠れ忍ぶ信州上田前さきの城主真田安房守が
二男左衛門佐幸村こそ故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍
師、關ヶ原の一戦以來關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺
ひ居るを先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以
て急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は一切彼の人に任せ
られよ。其の他關ヶ原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛
親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ
良將なるが、豫て因みは附け置きたり。上御使を以て招か
せられなば、心を傾け馳せ參ぜん。是、第一の手配りなり。
長してまた籠城となつたる曉敵を防がん手配りは。」市そ

の儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州
の山々より材木數多伐出させ、商業の爲といつはり、紀伊川
の川上より浪華津に押流させ、御船入に積み置いたり。ま
つた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧
米あり。籠城數年に亙るといふとも、なほ支ふるに餘ある
べし。」長それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、
近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」市甲冑・兵具も
乏しからず。」長城は名に負ふ南山不落。」市真田・後藤の智
勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君
家を守護するときんば。」長たとひ關東の老奸雄、利を啗は
せ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄す

とも、市「中々三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」
長「まつた若年には候へども愈軍始りなば、我亦一方を承り、
速水御宿和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命は固よ
り鴻毛の吹き翻さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結君臣將
士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし、
利欲に集る關東勢なに退くるに難かるべきや。この上は
仰に従ひ、このこと君に言上なし、直に軍の手配りせん。御
心安かれ、市正どの。」市「ほ、頼し、く、只大切は上下の
一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照し、成行
く末をかながみれば、」長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき
大野渡邊。」市「上、御發明に渡らせらるれど、」長「讒佞之を蔽

ふがゆる、」市「地の利はあれども人の和なく、」長「故太閤が
御威武に、をのゝき震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」市「天
の時にや、大御所のおのづからなる徳風にいつしか靡く世
の有様。」長「如何なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の」
市「有明の影薄れつゝ、」長「東天紅と八面に、かしましく鳴く
くたかけは、」市「新日、東天に昇るといふ、」長「世の成行の」
兩人「影なるか。」
是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚
痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぐと明けに
けり。市正おもてを正し、
市「萬一にも其の期に至り、百計合期せずば、それまでなり。」

當來を誰かは知らん。斃れて後止まんのみ。大丈夫、豈徒に杞憂せんや。後事を足下に託せし上はもはや思ひ残す事もなし。」長「して、そこもにはこれよりして、」市「居城茨木へ一まづ立越え、」長「といはるゝは請取りがたし。若しもやこれが今生の、」市「あゝいや、いさぎよき最期をだに、遂ぐべき機会を失ひし市正が命の拙さ、御詫の名こそ立ため償ひがたき身の大罪。此の身ひとつを兎や角と、千筋に迷ふ心のうち。いやなに心ばかりは此の後とても、君の御影につきそひまゐらせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなん其の時には、」長「それがしとても事敗れて、御運の末となるときは、此の世の思出、奉公をさめ、關東勢が真中に、縦横無盡

の血戦なし、花々しく討死なさん。」市「おゝ勇ましゝ、いさぎよし。それがし存へ、世にあらば、其の目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。尙再會は黄泉にて、まづそれまでは長門どの。」長「さやうござらば市正どの。」市「随分堅固で、」長「そこもともにも。

惜しきが中の生別離、まことや之に比ぶれば、檠は蜜にや似たるらん。右と左に立別れ、駒引寄せて色代や、悵然たる重成が、乗移りざまふりかへる、堤下に一もとくねり松あやしの人影、さは曲者と見る間も疾しや、打出す手裏劍あつとたまぎる聲もろとも、ねらひはそれし種が島。どうと大地に白倉權六、

白倉權六
大野修理亮の
家の子。

白「且元覺悟。」

と抜きうち、襟がみつかみ頭顛倒。音き、つけて物か
げより、驚きかけ来る十河本村。郎黨ども、見かへりもせ
ず乗移る秋さび月毛乗る人の心やいかに白駒の勇むを
制するかた手綱引戻さるゝ後髪。

兩人「さらば」「さらば。」

と西東見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろく。嘶く
駒の聲はして、立別れゆく兩人が此の世に残す面影は、ま
た見ぬ形とぞなりにける。(桐一葉)

師範學校 國文教科書 本科用卷三終

十河
十河十兵衛。
本村
本村清藏。
共に片桐市正
の郎黨。

史劇
七幕十場
昭和四年
上刊行

師範學校 國文教科書 本科用卷三附録

第三篇 漢字の音訓

一 字音

音

漢字のよみ方には音訓の二様あり。
字音とは漢字本来の發音によりて讀めるものなり。字音
はまた單に音ともいふ。

訓

字訓とは漢字の意味に相當する國語に譯して讀めるもの
なり。字訓はまた單に訓又は「よみ」ともいふ。
漢字の音として最も早く傳はりたるは百濟の音なるべし。
百濟音は支那南方の音かの國に入りて多少の變化を受け

百濟音

一字音

一

吳音

たるものなるべしといふ。

漢字傳來の時代は史に明證なければ詳かならされど應神天皇の頃に至りては百濟の國より阿直岐主仁等來りて朝廷に書を獻じ皇子に書を授けたるほどなれば學習の道も漸く開けたるべし。

百濟音の如何なるものなりしかは今明かならず。地名の讀方などに殘れるもの或はそれならん。

相模(サガム)

當麻(タギマ)

愛宕(アタゴ)

播磨(ハリマ)

駿河(スルガ)

敦賀(ツルガ)

第二に傳はりたるは吳音なり。吳音とは支那南方の音を我が國に傳へたるものなり。

百濟音の傳はりて後、幾ばくもなくして支那との交通盛になりゆきたれば直接に支那南方の音を傳へて、吳音は廣く使用せらるゝやうになりたり。現に王仁の齎したる論語千字文などの書名も「ろんごせんじもん」と讀みならはしたり。是やがて吳音なり。

漢音

男女(ナンニヨ) 文武(モンム) 西京(サイキヤウ)

我が國語に同化せる漢語は吳音によるもの多し。

第三に傳はりたるは漢音なり。漢音は支那北方の音を我が國に傳へたるものなり。

推古天皇以後盛に唐の文化を輸入し、遣唐使、留學生等の唐に赴くや、皆その首府長安に入りて北方の音を學び傳へたり。

男女(ダンヂヨ) 文武(ブンブ) 西京(セイケイ)

吳音と漢音とは字毎に皆異なりといふには非ず。

海川(カイセン) 多少(タセフ) 蘭菊(ランキク)

の如く全く同じきものも尠からず。

平安朝の初めは尙唐風模倣の世なりしかば、朝廷は屢令を下して盛に漢音を獎勵せしかども、吳音の傳來日久しくして、民間通用の音となりたりしかば、漢音は吳音を壓すること能はざりき。されど佛教の語にても、

弘法(コウバフ) 和尚(クワシヤウ) 擁護(ワウゴ)

唐音

など漢音に讀む例のあるは、當時漢音獎勵の名残なるべし。其の後漢音は儒書に、吳音は佛書に用ひらるゝこと通例となりたれど、前例の如く、必ずしも截然たる區別あるにはあらず。而して日用語は寧ろ吳音なるが多し。

第四に傳はりたるは唐音なり。唐音は宋元明時代の音を我が國に傳へたるものなり。

平安朝の中なる遣唐使を廢してより後、國際的交渉は少なくなりたれども、僧侶の佛敎を研究し、商人の貿易を營むが爲に宋元明等に往來せることは絶ゆることなかりき。従つてその時代の音を傳へたるを總じて唐音といふ。こゝに唐とは唐土といはんほどの意にて、唐時代の意にはあらず。されど漢吳音廣く行はれ居るを以て、その後の音即ち唐音は我が國に採用せるもの多からず。

行燈(アンドン) 和尚(チシヤウ) 亭(チン) 鈴(リン)

第五に傳はりたるは支那音なり。支那音とは現在支那に

支那音

行はるゝ音にて、重に北京の官話なり。

支那音は地名等に用ふるのみにて、他には殆ど行はれず。

上海(シヤンハイ) 廣東(カントン) 哈爾濱(ハルビン)

上述の如く漢字の音には、百濟音・吳音・漢音・唐音・支那音の五種あり。されど我が國に廣く通用せるは漢音・吳音の二種に限れり。

字音

字音は本來彼の土の音によれるものにはあれど、勿論純粹に支那流の發音をなせるものにはあらず、何れも多少國語流に同化せるものなり。こは西洋語を國語に取入れたるランブ・ポトなどの例に於けると同じわけなり。

漢音・吳音を字毎に識別せんことは容易ならず。美のビミ、男のダン・ナンに於けるが如く、漢吳音によりて父音を異にするもの即ち行を異にするものあり。又、間のカン・ケン、生のセイ・シヤウに於けるが如く、母音を異にするもの即ち列

漢音・吳音の識別

漢吳音異行
マ行 漢音
バ行 吳音

を異にするものあり。中に就きて、一定の法則を立て得べきもの凡そ左の如し。この標準によれば、漢吳音は大半これを識別し得べし。

甲 漢音吳音行を異にするもの（父音を異にするもの）

一 バ行マ行兩音あるものは、バ行は漢音にしてマ行は吳音なり。

萬 美 武 妙 木 馬 物

漢音バ行B バン ビ ブ ベウ ボク バ ブツ

吳音マ行M マン ミ ム メウ モク メ モツ

二 ダ行ナ行兩音あるものは、ダ行は漢音にして、ナ行は吳音なり。

男 女 尼 奴

漢音ダ行D ダン チョ チ ド

ダ行 漢音
ナ行 吳音

カ行 漢音
ワ行 吳音

吳音ナ行N ナン ニヨ ニ ヌ

三 カ行ワ行兩音あるものはカ行は漢音にして、ワ行は吳音なり。

和 會 慧

漢音カ行K(KW) クワ ケイ

吳音ワ行W ワ エ エ

四 ザ行ナ行兩音あるものは、ザ行は漢音にして、ナ行は吳音なり。

二 人 如 然

漢音ガ行Z ジン ジョ ゼン

吳音ナ行N ニン ニヨ ネン

乙 漢音吳音列を異にするもの（母音を異にするもの）

五 ア列エ列兩音あるものは、ア列は漢音にして、エ列

漢吳音異列
ア列 漢音
エ列 吳音

ア列 漢音
オ列 吳音

は吳音なり。
馬 下 華 間 山

漢音ア列 a an バ カ クワ カン サン
吳音エ列 e en メ ゲ クエ ケン セン

六 ア列オ列兩音あるものは、ア列は漢音にして、オ列は吳音なり。

含 叛 煩

漢音ア列 an ガン ハン ハン
吳音オ列 on ゴン ホン ボン

七 イ列エ列兩音あるものは、イ列は漢音にして、エ列は吳音なり。

衣 希 氣

漢音イ列 i イ キ キ

イ列 漢音
エ列 吳音

イ列 漢音
オ列 吳音

吳音エ列 e エ ケ ケ

八 イ列オ列兩音あるものは、イ列は漢音にして、オ列は吳音なり。

意 音 金 品

漢音イ列 i in イ イン キン ヒン
吳音オ列 o on オ オン コン ホン

九 イウ韻ウ列兩音あるものは、イウ韻は漢音にして、ウ列は吳音なり。

右 久 流

漢音イウ韻 iu イウ キウ リウ
吳音ウ列 u ウ ク ル

十 ウ列オ列兩音あるものは、ウ列は漢音にして、オ列は吳音なり。

ウ列 漢音
オ列 吳音

イウ韻 漢音
ウ列 吳音

エイ韻 漢音
ヤウ韻 吳音

文 物

漢音ウ列 u ブン ブツ

吳音オ列 o モン モツ

十一 エイ韻ヤウ韻兩韻あるものは、エイ韻は漢音にして、ヤウ韻は吳音なり、

兄 生 丁 平

漢音エイ ei ケイ セイ テイ ヘイ

吳音ヤウ yau キヤウ シヤウ チヤウ ヒヤウ

十二 エン韻オン韻兩韻あるものは、エン韻は漢音にして、オン韻は吳音なり、

建 遠

漢音エン en ケン エン

吳音オン on コン チン

オウ韻 漢音
ウ韻 吳音

十三 オウ韻ウ韻兩音あるものは、オウ韻は漢音にして、ウ韻は吳音なり、

口 頭 奉

漢音オウ ou コウ トウ ホウ

吳音ウ u ク ヅ ブ

十四 ツ韻チ韻兩韻あるものは、ツ韻は漢音にして、チ韻は吳音なり、

一 吉 質 日 八

漢音ツ tu イツ キツ シツ ジツ ハツ

吳音チ ti イチ キチ シチ ニチ ハチ

漢字には其の意義を異にするに従つてその音を異にするものあり。一々之を區別するは困難なれど、普通に使用するものは之を守らざるべからず。例へば左の如し。

同字異音

ツ韻 漢音
チ韻 吳音

一字音

二

慣用音

善惡 安樂 計畫 貿易 興敗 出藍 暴徒
 アク ラク クック エキ コウ シュツ バウ
 好惡 音樂 圖畫 容易 興味 出納 暴露
 ヲ ガク グワ イ キョウ スキ バク
 漢字の本音にはあらねど、我が國にて普通に行はるゝ音あり、之を慣用音といふ。慣用音は必ずしも排すべからず。

喫煙 輸入 駐劄
 本音 ゲキ シュ タフ
 慣用音 キツ ユ サツ

二字訓

字訓は漢字を國語に譯讀せるものなり。漢字は一字にして一義なるあり、多義なるあり。従つて字訓も一なるあり、

一字一訓

多くなるあり。

日(ひ) 月(つき) 人(ひと) 心(こゝろ)
 右は一字にして一訓なるものなり。

一字數訓

まづ(副詞)
 さき(名詞)
 さきんず(動詞)
 かなし(形容詞)
 かなしむ(動詞)
 かなしみ(名詞)
 ゆく(動詞)
 おこなふ(動詞)
 行(やる)(動詞)
 ゆき(名詞)
 おこなひ(名詞)

右は一字にして數訓なるものなり。

國語の書き方にては用言の語尾などには漢字の下に假名を送りて「悉し」行く「先づ」など書くを例とす。是國語は漢語とその性質を異にするが故に送假名の必要あるなり。

その實字音なれど、早くより用ひ慣れて國語に同化し、今は殆ど訓の如く見ゆるものあり。但しその語は多からず。

音訓に似たる

二字訓

漢語の熟字

一音訓
二訓讀
三原訓
四特訓

繪(エ) 錢(ゼニ) 菊(キク) 鉢(ハチ)

漢語の熟字は音讀するは當然なれど、之を國語に訓讀するに、原字の儘讀み連ぬるものと特殊の訓讀するものとあり。

山川(やまかは) 春秋(はるあき) 人心(ひとこころ)

右は原字のままの讀み方なり。

伯父(おぢ) 紫陽花(あぢさる) 八角金盤(やつて)

右は特殊の訓なり。

外國語を表記するために漢字を結合せる熟字あり。

隧道(トンネル) 燐寸(マッチ) 麵包(パン)

これらは何れも近時の漢熟語なり。

又國語を寫すに、二字以上の漢字を連ねて熟字を作ることあり。

而してその訓み方にも二様あり。手形(てがた) 爲替(かはせ) 山櫻花(やまざくらばな)

國語の熟字

一原訓
二特訓
三音訓
四湯桶讀
五重箱讀

右は原字のままの讀み方なり。

流石(さすが) 時鳥(ほととぎす) 五月雨(さみだれ)

右は特殊の讀み方なり。

本來の國語と漢語とを連ねて作れる熟語は音訓交へ讀まざるべからず。

敷地 小僧 手燭

訓音 しぎチ こゾウ てシヨク

奥行 縁側 頭取

音訓 オクゆき エンがは トウどり

俗に前者を湯桶讀後者を重箱讀といふ。

右の如き本邦にて作れる熟語は國語にて讀むべく、字音にて連讀すべからず。

この外、本邦にて作れる熟語にて音讀するものあり。

同熟字異義
一音
二訓
三音訓
四雜

残念(ザンネン) 心配(シンバイ) 難儀(ナンギ)
その中には國語にあてたる漢字を更に音讀したるが、後には通用の熟語となれるものあり。

をこ 物のさわがし おなじことわり

尾籠 物騒 同斷

ビロウ ブッサウ ドウダン

同一の漢字を用ひたる熟字にしてその讀方によりて意義を異にするものあり。これを四種に分つ。

工夫 利益 博士

コウフ リエキ ハクシ

クフウ リヤク ハカセ

右は共に音讀なれど意義異なり。

見合 預主 心遣

みあひ あづけぬし こゝろやり

みあはせ あづかりぬし こゝろづかひ

右は共に訓讀なれど意義異なり。

見物 間敷 目下

ケンブツ ケンスウ モクカ

みもの まかず めした

右は音讀と訓讀とにて意義異なり。

讀本 可成 出立

トクホン カなり シュツたつ

よみホン なるべく いでたち

右は音訓雜糅して意義異なり。

當字とは漢字の本義によらず我が國にて只その字音又は字訓の呼聲を借りたる用字をいふ。畢竟六書の假借に相

當字
一音
二訓
三音訓

當するものなり。

甲斐カヒ

屹度キツト

左様サヤウ

丁度チャウド

兎角トカク

右は字音を用ひたる當字なり。

兼かねて

吳くる

覺束なしおぼつかなし

仕舞し

まひ

見舞みまひ

矢張やはり

右は字訓を用ひたる當字なり。

左程サほど

馬鹿バカ

目出度めでタク

右は音訓混用の當字なり。

是等の當字は一般に慣用するものなれば之を用ふるも妨なし。唯相當なる漢字あるに拘はらず勝手に當字を作りて濫用するはあるまじきことなり。相當の漢字の知り難き場合には寧ろ假名書きにすべし。

和字

三 和字

和字とは我が邦にて漢字の結構に倣ひて作れる文字なり。天武天皇の時新字を作れりといへどその文字の如何なるものなりしかは明かならず。今日通用する和字には古きものあり又新しきものあれどその便利なるものは之を用ふるも妨なし。

普通を用ひらるゝ和字は左の如し。

漢字にならぬ和字

倂 <small>おあひ</small>	劬 <small>はたら</small>	風 <small>こがらし</small>	風 <small>かぜ</small>	峠 <small>たうげ</small>	吠 <small>かみ</small>	嘶 <small>はな</small>	杣 <small>こま</small>	枳 <small>かき</small>	楸 <small>しきり</small>	檉 <small>かじ</small>	
筆 <small>ふで</small>	畑 <small>はた</small>	島 <small>はたけ</small>	怵 <small>こは</small>	襪 <small>たすき</small>	躡 <small>しりぞ</small>	聽 <small>やが</small>	迄 <small>およ</small>	込 <small>こ</small>	辻 <small>つじ</small>	迎 <small>むか</small>	適 <small>あつぱれ</small>
鏝 <small>かすり</small>	鑢 <small>すり</small>	問 <small>つか</small>	鞆 <small>たもと</small>	虱 <small>か</small>	鱒 <small>ます</small>	鰯 <small>いわし</small>	鱒 <small>ます</small>	鵲 <small>うづ</small>	鳴 <small>な</small>		

右は何れも二字の意を合せて作れる和字にて所謂會意の文字なり。訓ありて音なし。たゞ劬の字は近來「自劬」[労働]など用ひてドウの音を附することゝなれり。

同形の漢字
ある和字

鈺ヒョウは諧聲の和字ともいふべし。鷹トウ全は合字なり。
 伽カ 偲シ 咄ツツ 嚙カハ 拵ツボ 榎エノ 柀ヒシキ 樋ヒ 沖ウチ 滯ヒ 萩ハギ
 鏑カサ 鯉カサ 鶉ヒナ 鶉ヒナ 鶉ヒナ

右は本邦にて製作せる會意の和字にして、漢字に同形の字あれど偶合なるべし。

衆シュウ 扱セツ 檣セウ は二字の音又は訓を合せたる合字なり。

狎シヤ 燭ジュク は諧聲の和字なり。何れも同形の漢字あり

といへど、偶合と見るべきなり。

哩リ 吠フイ 時シ 耗コウ 秆カン 疋フ
キロソトル キロソトル キロソトル

などは西洋の數詞を寫す爲に作れる一種の和字なり。

師範學校 國文教科書 本科用卷三附錄終

洋語和字

明治三十六年十二月五日
 明治三十七年十二月八日
 明治三十八年十二月九日
 明治三十九年十二月十日
 明治四十年十二月十一日
 明治四十一年十二月十二日
 明治四十二年十二月十三日
 明治四十三年十二月十四日
 明治四十四年十二月十五日
 明治四十五年十二月十六日
 明治四十六年十二月十七日
 明治四十七年十二月十八日
 明治四十八年十二月十九日
 明治四十九年十二月二十日
 明治五十年十二月二十一日
 明治五十一年十二月二十二日
 明治五十二年十二月二十三日
 明治五十三年十二月二十四日
 明治五十四年十二月二十五日
 明治五十五年十二月二十六日
 明治五十六年十二月二十七日
 明治五十七年十二月二十八日
 明治五十八年十二月二十九日
 明治五十九年十二月三十日
 大正元年一月一日
 大正二年一月一日
 大正三年一月一日
 大正四年一月一日
 大正五年一月一日
 大正六年一月一日
 大正七年一月一日
 大正八年一月一日
 大正九年一月一日
 大正十年一月一日
 大正十一年一月一日
 大正十二年一月一日
 大正十三年一月一日
 大正十四年一月一日
 大正十五年一月一日
 大正十六年一月一日
 大正十七年一月一日
 大正十八年一月一日
 大正十九年一月一日
 大正二十年一月一日
 大正二十一年一月一日
 大正二十二年一月一日
 大正二十三年一月一日
 大正二十四年一月一日
 大正二十五年一月一日
 大正二十六年一月一日
 大正二十七年一月一日
 大正二十八年一月一日
 大正二十九年一月一日
 大正三十年一月一日
 大正三十一年一月一日
 大正三十二年一月一日
 大正三十三年一月一日
 大正三十四年一月一日
 大正三十五年一月一日
 大正三十六年一月一日
 大正三十七年一月一日
 大正三十八年一月一日
 大正三十九年一月一日
 大正四十年一月一日
 大正四十一年一月一日
 大正四十二年一月一日
 大正四十三年一月一日
 大正四十四年一月一日
 大正四十五年一月一日
 大正四十六年一月一日
 大正四十七年一月一日
 大正四十八年一月一日
 大正四十九年一月一日
 大正五十年一月一日
 大正五十一年一月一日
 大正五十二年一月一日
 大正五十三年一月一日
 大正五十四年一月一日
 大正五十五年一月一日
 大正五十六年一月一日
 大正五十七年一月一日
 大正五十八年一月一日
 大正五十九年一月一日
 大正六十年一月一日
 大正六十一年一月一日
 大正六十二年一月一日
 大正六十三年一月一日
 大正六十四年一月一日
 大正六十五年一月一日
 大正六十六年一月一日
 大正六十七年一月一日
 大正六十八年一月一日
 大正六十九年一月一日
 大正七十年一月一日
 大正七十一年一月一日
 大正七十二年一月一日
 大正七十三年一月一日
 大正七十四年一月一日
 大正七十五年一月一日
 大正七十六年一月一日
 大正七十七年一月一日
 大正七十八年一月一日
 大正七十九年一月一日
 大正八十年一月一日
 大正八十一年一月一日
 大正八十二年一月一日
 大正八十三年一月一日
 大正八十四年一月一日
 大正八十五年一月一日
 大正八十六年一月一日
 大正八十七年一月一日
 大正八十八年一月一日
 大正八十九年一月一日
 大正九十年一月一日
 大正九十一年一月一日
 大正九十二年一月一日
 大正九十三年一月一日
 大正九十四年一月一日
 大正九十五年一月一日
 大正九十六年一月一日
 大正九十七年一月一日
 大正九十八年一月一日
 大正九十九年一月一日
 大正一百年一月一日

卷一	金五拾五錢
卷二	金四拾五錢
卷三	金四拾五錢
卷四	金四拾五錢
卷五	金四拾五錢
卷六	金四拾五錢
卷七	金四拾五錢
卷八	金四拾五錢
卷九	金四拾五錢
卷十	金四拾五錢
卷十一	金四拾五錢
卷十二	金四拾五錢
卷十三	金四拾五錢
卷十四	金四拾五錢
卷十五	金四拾五錢
卷十六	金四拾五錢
卷十七	金四拾五錢
卷十八	金四拾五錢
卷十九	金四拾五錢
卷二十	金四拾五錢
卷二十一	金四拾五錢
卷二十二	金四拾五錢
卷二十三	金四拾五錢
卷二十四	金四拾五錢
卷二十五	金四拾五錢
卷二十六	金四拾五錢
卷二十七	金四拾五錢
卷二十八	金四拾五錢
卷二十九	金四拾五錢
卷三十	金四拾五錢
卷三十一	金四拾五錢
卷三十二	金四拾五錢
卷三十三	金四拾五錢
卷三十四	金四拾五錢
卷三十五	金四拾五錢
卷三十六	金四拾五錢
卷三十七	金四拾五錢
卷三十八	金四拾五錢
卷三十九	金四拾五錢
卷四十	金四拾五錢
卷四十一	金四拾五錢
卷四十二	金四拾五錢
卷四十三	金四拾五錢
卷四十四	金四拾五錢
卷四十五	金四拾五錢
卷四十六	金四拾五錢
卷四十七	金四拾五錢
卷四十八	金四拾五錢
卷四十九	金四拾五錢
卷五十	金四拾五錢
卷五十一	金四拾五錢
卷五十二	金四拾五錢
卷五十三	金四拾五錢
卷五十四	金四拾五錢
卷五十五	金四拾五錢
卷五十六	金四拾五錢
卷五十七	金四拾五錢
卷五十八	金四拾五錢
卷五十九	金四拾五錢
卷六十	金四拾五錢
卷六十一	金四拾五錢
卷六十二	金四拾五錢
卷六十三	金四拾五錢
卷六十四	金四拾五錢
卷六十五	金四拾五錢
卷六十六	金四拾五錢
卷六十七	金四拾五錢
卷六十八	金四拾五錢
卷六十九	金四拾五錢
卷七十	金四拾五錢
卷七十一	金四拾五錢
卷七十二	金四拾五錢
卷七十三	金四拾五錢
卷七十四	金四拾五錢
卷七十五	金四拾五錢
卷七十六	金四拾五錢
卷七十七	金四拾五錢
卷七十八	金四拾五錢
卷七十九	金四拾五錢
卷八十	金四拾五錢
卷八十一	金四拾五錢
卷八十二	金四拾五錢
卷八十三	金四拾五錢
卷八十四	金四拾五錢
卷八十五	金四拾五錢
卷八十六	金四拾五錢
卷八十七	金四拾五錢
卷八十八	金四拾五錢
卷八十九	金四拾五錢
卷九十	金四拾五錢
卷九十一	金四拾五錢
卷九十二	金四拾五錢
卷九十三	金四拾五錢
卷九十四	金四拾五錢
卷九十五	金四拾五錢
卷九十六	金四拾五錢
卷九十七	金四拾五錢
卷九十八	金四拾五錢
卷九十九	金四拾五錢
卷一百	金四拾五錢



編者 吉田 彌平

東京市神田區通神保町六番地

發行者 上原 才一郎

東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店

(電話) 神田三〇八七番

振替口座東京三二七番

印刷者 四海民藏

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候は、直に御送附可致候



所見
師
岩
信
中
也

広島大学図書

200018388



庫

24

88